方言研究の概観

東條操

岩波講座　日本文學

方言研究の概觀

東條操

岩波書店

方言研究の概観

東　條　操

目次

方言學と言語地理學

方言に關する研究は十九世紀以來頓に盛になり、今世紀の初に佛蘭西の Gilliéron が Edmont の助力を得て有名な佛蘭西言語圖卷（L'Atlas linguistique de la France）を公にしてから一層その面目を新にしたかの感がある。我國に於ても昭和の御代の初年から、言語學民俗學の興隆と共に方言研究の叫びが漸く學界の間に高まつて來て、今日では全國各地に熱心な研究者が多く現はれて來た。目下の狀態に於て最も必要だと思はれるのは正しき方言研究法の提示である、この方法論さへ確立すれば全國の研究調査を統一して國語方言學の樹立を見るの日も必ずしも遠くあるまいと思はれる、この小篇の如きは敢てその方法を說かんとするものではない、たゞ擡頭し來れる方言研究の新潮を紹介する勞をとるだけの事である。

「方言」の意義については「一言語の分岐せるもの」と云ふだけは一致してゐても之に廣狹種々なる說が行はれてゐる、廣きは語族中の一國語を指して方言と云ひ、狹きは個人の言語を指して方言と見る說さへある。學者間に於ても所謂、階級方言、地方方言の二類を總稱して方言とするものと、地方方言のみに限らんとするものとの兩說がある、所謂階級方言（Class Dialect）は個人の屬する言語團體の相違によつて起るもので士農工商、各その用語を異にする如きものを云ふ。英語の Dialect はもと「會話」「話し振」等の意義を有する希臘語から出て居るので階級方言をその中に含む事は一應道理である。しかし Dialectology（方言學）の對象は地方方言のみで階級方言を包含しないのが通例である、從つてなるべくは「方言」と云ふ術語は地方方言にのみ使用したい、且、漢語の「方言」は元來地方に關

した言葉で中央東西南北の五方の言語を意味するものである、室町時代に行はれた「郷談」と云ふ漢語も郷土の言語を指すものである。我々は漢語の「方言」の本義によつて「方言とは國語の一部をなす一地方に行はれる言語」と云ふ定義に從ひたい。卽ち地方方言 (Local Dialect) をのみ意味するものとし、階級方言は之を除外して考へたい。

方言を定義して「一地方に限りて行はるる言葉」とするのは稍窮屈である。一地方に行はれる言葉の中には、人(ヒト)とか竹(タケ)とか云ふやうな全國に共通する單語もある(之もアクセントまで考へれば別論となるが)、方言の內容を此等共通語以外のもののみに限る考は世上一般の通念ではあるが實は正しくない、かゝる考へ方は方言を野卑な言葉、滑稽な言葉とする誤解に導き易い。方言とは「一地方に限りて行はるる言葉」にあらずして「一地方に行はるるすべての言葉」と考へたい、その中には全國共通のものもあるべく、發音に相違あるもの、意義に相違あるもの、全然特殊な土語もあらう。たゞ研究の便宜上、特殊相のみを取扱ふことは便法として之を許してよい。

言語は時とともに變遷するものであるが、もとは同一の言語でも之が地域を異にして行はれる場合には特に言語に相違を生じ、時の經過と共にその懸隔は愈、大となり、方言の特殊性は此の如くにして發達する。これは交通の少い爲に言語の變遷の仕方が地方で同一でない爲で、言語がその地方の特殊事情に應じて變つて行くのである。地方間の交通が或る事情の爲に頻繁となる場合には之と反對に、互に他地方の影響をうけて特殊性の減じる事もある。明治維新以後の國語方言の狀態はこの好き例である。しかし、いくら方言の特殊性が減じても全國をあげて全く同一な語が行はれる事は決して無い、たゞ特殊性が減退するだけである。

方言の研究は東西共に古代に發してゐる。西洋では希臘に各地方言の研究があり、東洋では支那に周秦の間に輶軒の使者の方言採集事業があり、少くも前漢に揚雄の別國方言の十三卷がある。之を我國に見るも萬葉集に東歌や防人

歌の佳調を見出す事ができる。しかし眞の方言研究と見るべきものは、各國語を蒐集し之を編纂する好尙の起つた十八世紀に端を發し、十九世紀に獨逸に於て漸く體系を整へるに至つたものと云はれる。當時獨逸には新しい言語學が一方に擡頭して居り、一方で俚歌、俗謠、民譚の類の採集が盛であつた。言語學者 Jacob Grimm は弟を助けて御伽噺を編纂したが彼は一八一二年に「それ〲の個性といふものは言語界に於ても尊いものとして敬はなければならない。どんな小さいつまらない方言でも各自の性質ありのままに置いて他から餘計な手を加へる樣な事をせず、その個性を尊重するのは望ましいことである。何故なれば斯かる方言こそ勢力あり人に重んぜられる國語以上にすぐれた便宜をきつと隱しもつてゐるからである」（市河神保兩氏譯言語四十七頁による）と方言尊重の言を發してゐる、「今まで丸で顧みられなかつた民間方言を尊重する樣になつた事はこのグリムの言に於て始めて顯れたものである」と「言語」の著者は附け加へた。方言研究が言語研究のα（アルファ）でありω（オメガ）であると云はれてゐる現代から考へると今昔の感はあるものの、我國などでは今日でもこのグリムの言が素直に受け入れられるであらうか。

實を云へば獨逸にはグリム以前に方言研究家として Karl Fulda があり、既に一七七三年に獨逸語の二大方言、一七八八年に獨逸方言採集試論の著述をもち、而も「古語は方言に殘る」と云ふ見解をも懷いてゐた。このフルダの學徒には瑞西方言學を著した Stalder あり、バヴリヤ方言文法を著した Schmeller あり科學的方言研究の勝れた模範と云はれてゐる。爾後、獨逸には方言研究家が輩出し、その論文は充棟汗牛の譬の通り今日に至つてなほ止まないが、近來では佛國の言語地理學が獨逸に逆輸入されてゐる。しかし、獨逸の方言研究は初等教育への應用に於てその特色がある。

英國では Garnett を以て方言研究の祖とする、氏は一七八九年に生まれてゐるから英國の研究は獨逸の後塵を拜

して起つたものであるが、一八九八年に出版された The English Dialect Dictionary は獨逸にもその比を見ざる大方言辭書である。この辭書の完成には英國方言協會と云ふ大なる背景があつた。協會は語源研究を以て有名な Skeat 教授の主唱によつて一八七三年、剣橋大學内に創立され二百五十有餘の會員を擁して八十冊の方言叢書を出版し無數の方言資料を蒐集した。これらの資料を基礎として同會理事の Wright の手によつて編纂されたものが彼の英國方言辭書六冊である、この辭書は二百年前の古記録にまで遡つて古今の英國方言を集成したもので前後二十餘年の星霜を費したものである。卷尾には方言語法を附録として掲げてある。この外に方言の史的研究もスキート等によつて試みられ、方言の地理的分布は Ellis によつて略その區劃が明かにされた。かくて協會は十二分にその所期の目的を達成して一八九六年に解散した。この英國の方言研究の後を承けて、方言學を新なる言語地理學に改變し、方言研究上に一大革命を與へたものが佛蘭西である。

佛蘭西では十九世紀の終りから方言に關する研究者が多く現はれた。獨人であるが浪漫言語學を開いた Diez 老教授の方言記錄蒐集がその初めをなし、次で Gaston Paris の方言研究の鼓吹は多くの研究者を生み、かくてジイエロンの登場となる。氏は巴里の高等學院に於て一八八〇年頃から Gallo-romans 方言學を教授し同志と方言雜誌を創刊し又各地に於て方言を採集したが、從來の方法に不滿を感じつひに全國的蒐集を計畫し、そのよき協同者としてエドモンを發見した、エドモンはジイエロンの作つた質問集を携帶して選まれたる六百三十八の地點について臨地調査を試み一八九七年より一九〇一年にわたつて之を完了した、質問集は約二千の單語と短文とを含むものであつた。ジイエロンはこのエドモンの報告を整理して一九〇二年より一九一二年にわたり千九百枚にあまる佛蘭西言語圖卷を公刊し劃期的な大事業を完成したが、更に一九一四年以來は同じ方法の下にコルシカの言語圖卷を公にして居る、所謂、

言語地理學（La géographie linguistique）はかくてジイエロンより生れ出たものである。

言語地理學の特色は言語の分布を地圖上に現はす點にあるが、これだけならば、むしろ、獨逸の Wenker をその創始者とすべきである、このヴェンケルの圖錄は一八七六年に既に發刊されてゐる。また、ロマン語の先覺としては Gustav Weigand が一八九八年より圖卷を公にしてゐる。しかし、ジイエロンの圖卷は先覺に暗示はうけたには相違ないが、その精神に於て全く更新されたものであつた。この言語地理學と舊來の方言學との相違について述べる事は之を後に讓り、先づこの新しき言語研究法が如何に世の歡迎をうけ、多くの後繼者を生んだかを語りたい。

即ち Griera は一九二三年以降 Catalan の言語圖卷を刊行し、Jud と Jaberg とによりて伊太利及南部瑞西言語圖卷が一九二八年以降に刊行され、bas-breton の言語圖卷も一九二四年以來 Roux によつて公にされてゐる。更にこの言語地理學は獨逸に於てそのまま Die Sprachgeographie と譯され、そこにも多くの圖卷を生んで居る。なほ傳ふるところによれば米國も一九二九年にエール大學に各大學教授を會して一大言語圖卷を作らんとする計畫をなしたと云ふ。

隣邦、中華民國もこの新研究法の洗禮をうけてゐる。民國の方言調査は民國十三年に北京大學研究所内に方言調査會が設けられた時に初まる、この調査會は周作人の提議によつて作られその調査論文等は國學週刊の上に表はれてゐる、佛國に於て音聲學を學んだ劉復は言語圖卷に倣つて支那の方言地圖を作成せんとして居る。彼は音標文字を使用し、四聲の如きも曲線を以て描出する新樣式によつてゐる。

飜つて我國を見ると明治二十年頃に初まる方言研究は明治卅五年前後を以て一つの峰頂を見せて居るが、明治末年より大正初年に於て萎靡振はず、昭和の御代に於て再び勃興し燎原の勢を以て今や全國に方言尊重、方言採錄の機運

を作つた。此等の委曲については次章に述べる積りであるが、この昭和の方言研究にも佛國の言語地理學よりの影響が極めて濃厚に現はれて居る。如上の如き情勢であるから、方言學と言語地理學との概念を明かにする事は方言研究に入る第一歩であらう。

世界の言語はいくつかの語族に分れ、各語族內には若干の國語を含み、各國語は數團の大方言に分れ、各大方言は更に數群の小方言に分裂し、その小方言より更に下位の小方言を分出し、分裂に分裂を重ねたその最後の單位は各人の言語である。從つて言語學の對象とするところも、國語學の對象とするところも、方言學の對象とするところも範圍に廣狹の差こそあれ等しく言語現象である事は云ふまでもない。勿論、言語學では言語の性質とか、言語の發生とか云ふ一般的問題を取扱ひ、國語學に於ては國語系統の問題や時には國語政策の如きものを附說する事もあるが、國語學は特殊言語學であると云つてよく、方言學も同樣に國語學の特殊的研究と見るべきである。

各地の方言が集まつて一國語を構成する以上、各方言の研究を除けば國語の研究といふものは殆ど存在しない。ただ僅に標準語の問題が殘るわけであるが、之も首府の方言などを基礎として作られるものであるから、方言の研究の範圍を全く出たものでない。

從つて方言學の目的も對象も研究方法も、國語學や言語學の目的、對象、研究法とあまり違つたものではない。即ち對象はその地方の言語事實であり、研究法は音韻、單語、措辭、語構造等の各方面よりの分析及綜合的研究であり、その目的はその地方の言語事實を支配する一般法則を發見せんとするものである。

從來の方言學は大體、かくの如きものであつた、その結果、調査はなるべく狹小なる地域を精密に行ふを以て理想としその地方の言語事實を洩らさず記載するを以てその任とした、かくて各地方、各地方の方言集や方言語典が出版

されて來たのである。

しかし、此等の各地方の言語事實を一度說明しようと云ふ要求が起ると一地方の事實ばかりでは之を明かにする事が出來ない、どうしても之と關係ある地方の現象を比較考察する事が必要となる。この時、所要の地方の方言の研究書を入手する事は頗る困難である、況や全國の方言を比較考察するとなるとこの困難は著しく增大する、たゞに所要の地方の方言書を見出し難いばかりでなく、偶、存在する方言書も記述の方針が違ひ、寫音の方法に正否があり、比較の目的に叶ふものは極めて少いのが常である。

ジイエロンが一定の質問集の下に全國の代表的地點をエドモン一人に調査させたのも恐くは全國的の比較對照を試みん爲であつたらう、かくして氏の言語圖卷は生れたのであつたが、この言語圖卷は前に云つた通り更に言語地理學を誕生して方言學の革命をなしたのであつた。

言語地理學の名稱は正しくは言語と地理との一切の關係を攻究する學に對して與へらるべきものであるが、ここに所謂、言語地理學とは單語の地方的分布を攻究する學問である。言語地理學を說明する爲には圖卷作成の方法について說明するのが順序であらう。ジイエロンの圖卷は白地圖の上に調査地點を代表する數字が表はしてあり、その數字の上に、その圖の標語に相當する方言が音標文字を以て記入されて居り、分布圖は標語一語について一枚づつ作られるのが普通である。卽ち、「蜜蜂」の分布圖では各數字の上に蜜蜂の方言が音標文字で記されて居り、蜜蜂の各地方言を一枚の圖の上に比較對照する事が出來る、之は從來の方言書や方言辭書の十分に果し得ざりしところである。

圖卷の性質が此くの如きものであるから、之から生まれた言語地理學は舊來の方言學に比して相違する幾多の特質がある。

第一に言語地理學は單語、語法形式の各個をその研究の主題とし、その分布を圖示し研究する。然るに方言學では地方を單位としその地方内の一切の言語事實を記載し、どこまでも地方を主體とする。

第二には言語地理學はその性質上、相當に廣き地域を調査範圍とする事が第一條件である。然るに方言學の調査する範圍は寧ろ狹小なる方が調査が完全に出來る。

第三に言語地理學は選ばれたる地點に於て選ばれたる言葉を調査する。然るに方言學はかゝる選擇をしないでも差支ない、否、理想的調査に於ては一地方のあらゆる地點のあらゆる言葉を網羅せんとするものである、(言語地理學は大體、全國的調査を少數の人で行ふので、かゝる全體的調査は望めない。)

第四、言語地理學では質問集にあぐべき標語の選擇は全國の方言の狀態に通じたものの手で周到に作成せられないと調査は失敗に終る、その代り、この質問集をもつて調査する採集者は音表記法の知識以外には必ずしもあまり多くの言語學的知識を要しない。然るに方言學の方は調査者に言語學の素養が相當に必要である、その代り地方方言の豫備的知識は無いでもよい。なほ、調査物の整理の上に兩者には著しい相違がある。

以上の如き相違點が擧げられるばかりでなく言語圖卷の出現は從來の方言學、否言語學の上に多くの問題を提出したのである。ジイエロンの言語圖卷の出版は少壯文法學派の言語學を事實の上から訂正したものと云はれてゐるが、言語地理學が方言學の上に投げた一つの大なる問題は方言區劃に關する疑問であつた。從來の方言學は種々なる音韻、語法事實の分布の上に立脚して方言區劃なるものを想定するのが常であつた。然るに語法形式よりは寧ろ多くの單語を材料とする言語地理學は單語の分布狀態の千態萬樣なる事實をあげて言語區劃の成立せざる事を力說し、之に代ふるに改新波（onde d'innovation）を說き、等語線（ligne isoglosse）を說く。音韻、語法の現象は比較的に固定的性

質をもつてゐるが、單語は新語の發生や傳播によつて頻繁な變化をする。ここに一の言語中心地を假定すると、この中心地に行はれた例へば「かたつむり」なる方言は、新に發生した「でんでんむし」なる方言の爲に中心地を奪はれて、波狀をなしてその外周に擴がる。更に他の新語が中心地に發生すれば、この「でんでんむし」もやはりやがては外周に波狀をなして擴がる運命をもち、其時「かたつむり」は更に遠き外周に擴がる。しかし、この波形は各語によつて必ずしも同一でない。かくの如くにして各語の分布狀態は各語每に相違して來る。單語を材料として出發した言語地理學が從來の方言區劃を認めないのは自然である。

言語地理學ではかく各語のありのままの分布を圖上に表し、その材料は全く同時代のものである、然らば史的變遷については言語地理學は何等の關係を持たないかと云ふと決してさうではなく、言語地理學の一半の仕事は、この分布を圖上に讀んで、ガストン・パリスの所謂、各語の歷史を探らんとするものである。言語地理學は言語地質學であると云ふ人があるが、言語の各斷層は各地に露出して、その言葉の歷史を暗默の中に語つてゐる。

言語地理學の貢獻は從來の言語學の机上の論を事實の上から立證し又は反證して見せた點にある、しかし、この調査では質問集の作成と地點の選定と質問の方法と表記法とがその生命であつて一度、之を誤まれば全く調査は無效となる惧がある。また舊來の方言辭書や方言語法の如きものもその方法宜しきを得れば多大の成績を收める事が出來るし、言語圖卷とは自らその目的に相違するところがあり互に長短があつて之は相補ふべき性質のものである、新しきを追ふあまり舊來の方言學の價値を顧みないのも決して當を得たものでない。

最後に方言研究の目的について一言したい、方言研究の目的なり動機なりは各時代によつて相違がある、例へば古語研究の補助材料とする爲に之を研究したり、標準語使用のために地方語と標準語を比較したり、時には方言矯正の

爲にさへ方言が研究された、また近くは鄕土文化の研究のために、民俗學の一分科と見ての研究もある。我國の方言研究が從來、如何たる動機から行はれて來たかは次章に述べる事とするが、筆者は方言の研究はやはり方言自體のための研究でなければならないと思ふ。一國の言語が生滅し消長する姿を如實に眺めるためには、各地の方言の上に現はれる言語事實を靜觀するのが最も賢明な方法である、言語の活きた機構の祕密を知るために方言は唯一の材料である、方言ならば如何なる精密な調査も實驗も行ふ事が出來る、文獻を材料とする研究はこの點に於て遺憾の點が多い、尤も方言も現代の狀態は分るけれど過去の狀態については資料の缺乏から細かい點を認める事は困難ではあるが、之も方言の各斷層面を考へる事によつてその大體を髣髴する事は絕望でない。かくて國語史の全面的展開は方言を研究する事によつてのみ可能である。全面的展開は標準語の語られる一方言のみでなく互に相關する全國方言の狀態を同時に眺めつゝ、その時間的變化を考察する事によつて明かとなる、かゝる意味で方言を見る事が方言研究の眞の目的である、だから方言研究の目的は旣にその研究の過程中に內在してゐると云つてもよい。明治期の方言研究は標準語制定のため、又は方言矯正のための研究であつたが今日の研究は寧ろ方言それ自體のため、又は方言尊重の念に發した研究である。

○本章關係參考論文及著書

方言の本質　東條操（國語と國文學　第三十六號　國語國文學本質研究）

方言といふ概念　石黑魯平（方言　第二卷第五號）

方言研究の展望　安藤正次（國語教育　第十六卷第十號）

方言學・その理論と實際　小林英夫（民族　第三卷第三號）

言語史と言語地理學　アドルフ・テラシエ　吉町義雄譯（方言　第二卷第一號、第三號）
言語學概論　ソツスユール　小林英夫譯（岡書院發行）

國語方言研究の回顧

國語方言の研究は江戸時代に至つて現れる、研究史はそこから書き始めてよいのであるが筆者は多くの研究者のやうに萬葉集の東歌を割愛するに忍びない。

萬葉集の第十四卷には東歌二百三十首が一卷をなし、第二十卷の前半には防人歌九十三首が掲げてある、この防人歌は八首を除き天平勝寶七年二月筑紫に遣はされた東國の防人の歌であり、十四卷の東歌は少くもそれよりは古い時代のものであると見られてゐる、東歌と云つても必ずしも純粹の東言葉で詠んだものとは思はれないが東國方言の俤がそこに漂つてゐる事は事實である、奈良朝初期の方言がその俤だけなりと今日に傳つてゐる事はまことに驚くべき學界の奇蹟と云つてよい。

十四卷の東歌については時代も不明だし、作者にも都人が混じて居ると云ふ說があり、その國別も粗漏であり、また一音一字の書方も後世、書改めたものかとの疑もあり之を方言資料とするには幾分危まれる點がある、之に反して二十卷の方は時代は勿論、作者の生國、姓名まで明白であつて確實な資料とする事が出來る。然るにこゝに皮肉な事は特殊な方言と思はれるものは十四卷の歌に多く含まれ二十卷の歌には發音上の訛の外には方言の特殊相があまり現れて居ない、之は土語の多い歌が拙劣な歌として選にもれたものかと思はれる、既に左註に拙劣な歌を棄てた事が見えてゐる。二十卷の防人の歌が大伴家持の手によつて撰錄された事は云ふまでもないが、家持はどんな動機で防人の

歌を集めたらうか、勿論、言語研究の爲で無いのは云ふまでもない、當時、家持は越中の國守の任がはてて奈良の都に歸還し兵部少輔になつて居た、その職務の關係上、東國の防人が遠い筑紫の任につく爲に親と別れ妻と離れる哀別離苦について見聞し、これに同情をよせた結果が防人部領使を通じての防人歌の蒐集となつたのではあるまいか、自ら防人に代つて感傷的な歌を多く作つて居るのから考へてもさう思はれる。從つて土語訛語の形式よりは別離の哀情を述べた內容に心を惹かれた事であらう。我々は歌人の同情がゆくりなく上古の貴重な方言資料を殘してくれた事に、感謝を捧げねばならない。

十四卷の東歌の輯錄については、その編者も動機も之を明かにする事が頗る困難である。この編者が養老三年に常陸守であつた藤原宇合に屬官として仕へたらしい高橋蟲麿であらうと云ふ說は早く佐佐木博士の唱へられたところである。蟲麿が方言にも興味をもつたらうと云ふ事は想像されないでもないが蟲麿が十四卷の東歌を輯錄したと見る事にはまだ證據が不足である。編者が不明であるとともに輯錄の動機も分らない。之は二十卷の防人歌のやうに別離の哀を歌つたものでなく多くは相聞の歌で地方情趣の豐かな卷である、詩經の國風にならつて民俗を知らんためにこの風俗歌を集めたと見る說もあり、東人まで詠歌するに至つた王化を稱へるための輯錄とする說もある。とにかく防人歌とは別な動機によつて集められたものであらう。十四卷の國別はあまり、あてにはならないがそれに從へば大體次の通りである。

遠江（三）、駿河（六）、伊豆（一）、相摸（十五）、武藏（九）、上總（三）、下總（五）、常陸（十二）、信濃（五）、上野（二十五）、下野（二）、陸奥（四）。

上野、相摸、常陸の歌が多い。二十卷では

遠江（七）、駿河（十）、伊豆（ナシ）、相摸（三）、武藏（十二）、上總（十三）、下總（十一）、常陸（十）、信濃（三）、上野（四）、下野（十一）、陸奥（ナシ）

上總、武藏、下總、下野、常陸、駿河の順である。尤も之は二十卷所掲の歌數で、拙劣歌として捨てられた歌を加へると

下總（二十二）、武藏（二十）、駿河（二十）、上總（十九）、下野（十八）、遠江（十八）、常陸（十七）、上野（十二）、信濃（十二）、相摸（八）

となる。いづれにもせよ十四卷に比べて上野相摸二國の歌の減少が目立つ、十四卷に上野歌の多い事は上野が東國の一中心であつた爲か、それとも他に原因があつたのか、考ふべき問題である。

東歌の特殊な音韻や語法については、既に山田新村兩博士の御研究もあり、それに譲つて省く事とするが、當時の東國の西境が信濃、遠江にあつたと云ふ事だけは牢記しておきたい、この信濃、遠江の歌にも音韻の訛りは現はれてゐる。この後も長く東國語が中央の標準語に對して特別な方言として注意された事は、王朝、鎌倉時代に東聲、坂東聲などのだみたる事を記した記事の絶えない事でも分明である。

奈良朝の風土記などに見える零細の方言資料や王朝末期の歌學書の中に往々發見される方言に關する記載や鎌倉期の方言資料等については一切、今省略に從つておく。

著者未詳の人國記は室町の季世に作られたものと信じられて居るが、その中に諸國の言語に關する短評が見える。山城國の言葉に就ては「其言葉自然ト淸濁分リ善クテ譬ハ流水ノ滯フル事無フシテイサギヨキガ如シ」と賞揚し近畿諸國の言葉については之を可とする旨の評を下してゐる。然るに關東、土佐、九州の言語は

安房國　此國人ハ言葉溶卑劣ナレ𪜈……
土佐國　其言舌卑キナリ
肥前國　音聲ハ卑劣ナリ

の如くに卑劣と云ふ言葉を以て斥けて居る。陸奥出羽は「音聲スグレテ鄙劣ナリ」と酷評してゐるが注意すべき事は陸奥國の條に

惣而此國出羽上總下總常陸上野下野之類大形ハ人ノ音聲上拍子也

とある記事で之は

長門國　人之音聲モ下音ニ而上拍子成事無

と云ふ記事と共に注意すべきものである。

金春禪鳳の毛端私珍抄にある

なまる事坂東筑紫などのなまりもおよそ似たる物也、四國なまりはべち也五畿内京都のこゑにもちがふ也たとへば犬をいぬと云は京こゑ也、犬をいぬと云は坂東筑紫なまり也、犬をいぬと云は四國なまり也

と云ふ記事と共にアクセントの區別に關する初期の文獻として面白い。江戸になると

音は畿内は大體平聲なり西國は去聲にして東國は上聲なり（田宮仲宣、東牖子）

と云ふやうな三分說が現はれて來る。

京を中心とし、東に坂東、西に筑紫をおいて之を三大方言と見ようと云ふやうな意識は室町時代に發生して居たらしく既に「京へ、筑紫ニ、坂東サ」と云ふ諺は種々な書物に見えてゐる。三條西實隆公の日記の明應五年正月九日の

條に宗祇の談としてこの諺が出て居り、抄物では鑫測集、四河入海などにも引いてある。

室町時代のこの方言區劃意識を裏書し、各地方の言語の特色にまで及んだものは João Rodriguez の著した Arte da lingoa de Japam （日本語典）中の方言に關する研究で、これこそ日本方言の最初の學術的記載である。ロドリーゲスは一五六二年に葡萄牙に生れ、一五八六年卽ち天正十四年に來朝し伴天連とし、日本耶蘇會の爲に盡力した。彼は頗る日本語に熟達しツーズ（通事）の名を以て呼ばれてゐた。この日本語典は一六〇四年卽ち慶長九年から長崎の耶蘇會學林で出版された、同書百六十九丁以下に「或國々に特有な言葉遣ひや發音の訛謬について」と題する條があり、まづ日本の國々に「國郷談」と云ふ特殊な言ひ方や多くの訛のある事を述べ以下、「都」より初めて「中國」「豐後」「肥前肥後筑後」「筑前博多」「下一般」「備前」「關東」の順でその地方特有の言語について述べてゐる。之は當時の稱で「上（カミ）」といつた畿內地方と、「下（シモ）」といつた九州地方と、その中間の中國地方と、關東地方とを日本の方言區劃として認めたもので、土井忠生氏は本書中に「京へ筑紫ニ坂東サ」の諺も引用してあるので、大體この三區劃に中國を加へたものではないかと疑つて居られる。九州が細かく分けてあり說明も詳しいのは布教の中心地であつた爲に自ら記載が細かになつた事と思はれ、同時に西教の流布しなかつた地方について記載を缺いたのは止むを得ないが殘念な事である。ロドリーゲスが日本語典中にかく方言に關する特別の章を設け、なほ他の條にも屢方言に言及したことは彼の學者的な天分からも出て居る事だらうけれども、伴天連として信者の懺悔を聞くためなどにも方言知識の必要な事を感じての記述であらうと云ふ土井文學士の意見は傾聽に値ひするものである。卽ち、この方言の研究の動機には職業的意識が動いて居たのである。その材料についても信者等から直接に聞いたものもあらうし、他の布教師から獲たものもあらう。元文三年、西班牙人 Oyanguren がメキシコで出版した一七三八年版の日本語典の方言の記載は

全くこの書によつたものと云はれてゐる。

ロドリーゲスの文典には各方言の發音や語法については説明してあるが語彙についてはその説は殆どない。之を補ふものは次に述べる日葡辭書である。

この辭書は耶蘇會諸士の共編にかゝるもので語典出版の前年なる一六〇三年卽ち慶長八年に同じ學林から出版されてゐる。この辭書は吉利支丹の道を拓く爲めに渡來した布教師達の日本語修得の便宜のために編纂されたもので大略三萬の雅俗の單語を收載してゐる。この中に「上(カミ)」や「下(シモ)」の方言がかなり多數散見する。近藤國臣氏によると「上(カミ)」に行はれるもの百三十餘、「下(シモ)」に行はれるもの二百三十餘で、その外に「ある處又はある地方にて行はれる」語が十數語ある。この辭書にかく方言を多數採錄した動機も、語典と同樣に全く實用的な立場を考へての事であらう。なほ、この編纂には日本人も加はり數年の苦心の後になつたものだと云ふ。

江戸時代は方言研究が各方面から進められた時代である。その一つに、古語を求める興味から方言を研究せんとするものがあり之は國學者の間に起つたものである。「古語が方言に殘る」と云ふ説は旣に平安朝末又は鎌倉初期頃から見える考で、方言によつて古歌中の難語を解釋する事が出來たと云ふ逸話は色々な歌學書中に現はれて居り、その代表的意見は愚祕抄中の「金吾の説にふるき詞のかやうに難儀ありて偏にいひ定めぬことをば田夫にあひてあきらめよと侍りき」と云ふ言葉であつた。この考は、江戸時代に及んで愈有力となり、徂徠は奈留別志に「古の詞は多く田舍に殘れり」と云ふ説を述べ、宣長は玉勝間に「ゐなかにいにしへの雅言の殘れる事」と云ふ一章を書いた。古語の解釋を方言に求めんとする傾向は多くの國文註釋書の中にその實例を求める事が出來る。就中、鹽尻卷頭の天野信景の「しほじり」の説や、比古婆衣に見える平田篤胤の「きつ」の解釋は伊勢物語中の難語を方言で說いた代表的の例

である。

次に、俳諧者流によつて著はされた方言の著作がある。その第一は安原貞室のかた言である。これは五冊の横本で慶安三年に刊行されたものである。貞室は慶長十五年に京都に生れ、松永貞徳の正統をついで花の下第二世を稱した貞門の俳人である。慶安三年には四十一歳で當時十歳の元次と云ふ男兒があつた、この愛兒が友達と共に拙劣なる片言ばかり口にするので之を矯正する便にと書いたのが、この一帖であつた。新村博士は本書の解題に「本書は儼乎たる標準語の確立を意識した貞徳及び貞室の國語意識が溢るゝばかりに現はれてをるのみか愛兒に對して誠實に國語教育の範を垂れたものとして國語學史上恐くは空前絶後ともいふべき傑出した著述である」と稱揚してゐられる。「かた言」と云ふ言葉はもと、幼兒の舌の廻らぬ物云ひを指したものであるが後には一般に訛つて正しからぬ發音の言葉の義となり、本書でも多くは京都市井の訛語を時節、人倫、衣服等の部門に分けてそれについて教へてある。訛音を論じて京言葉の墮落を矯正せんとしたのが本書の主意である。このかた言は後に世話重寶記や大和言葉大成と題する書に引用され、浮世鏡第三にはその補遺が見える。浮世鏡はその序言に「都は土地清らに水すなほなれば音律かろくすみてたゞしとかや、されども片言は夷中にまさりて多く侍り……所は無上の花洛なれども上が上成はいたりて高く、中品より下なるが多くすむ所なれば片言は皆これがいふ事也、それをあやまりてもて上り、中品より上ざまの人もあやまり國風となれる也」と云つて居るのは確かに都會語の一面を捉へたものと云つてよい。京都の外に東國と西國とに言及し中國の方言についても多くの擧例がある。

第二は越谷吾山の物類稱呼、悉しくは諸國方言物類稱呼五巻である。越谷吾山は談林末流の俳諧師で享保二年頃武藏越谷で出生した、江戸に出て佐久間柳居、内田沾山の門に遊びやがて日本橋で立机した。物類稱呼を著した安永四

年には五十九歳頃であつた、彼が如何なる動機からこの書を著したかは、その序文には「邊鄙の人は一郡一邑の方語にして且てにはあしく訛おほしされども質素淳朴にしてまことに古代の遺言を失はず、大凡我朝六十餘州の中にても山城と近江又美濃と尾張これらの國を境ひて西のかた筑紫の果まで人みな直音にして平聲多し北は越後信濃東にいたりては常陸及び奥羽の國々すべて拗音にして上聲多きは是風土水氣のしからしむるなればあながちに褒貶すべきにも非ず畿内にも俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて是非し難し、しかしながら正音を得たるは花洛に過ぐべからずとぞ。今こゝにあらはす趣は共言の清濁にさのみ拘はるにもあらずたゞ他郷を知らざるの兒童に戶を出でずして略萬物に異名ある事をさとさしめて遠方より來れる友の詞を笑はしむるの罪を免れしめんが爲」と記してある。

これによれば例の「古語は方言に殘る」と云ふ考の影響も見え、都言葉と方言と何れを雅正とすべきものか褒貶は困難であると暗に方言の爲に氣を吐いてゐるのであるが、彼が如何なる興味からこの書を著したかはまだ十分に分らない。內容は天地、人倫、動物、生植、器用、衣食、言語の諸門を分けて全國の方言を類聚した方言辭書である、全國の方言を網羅した點が頗る珍しい、本草などの一部門については後に小野蘭山の本草綱目啓蒙の如き全國の方言を掲記したものもあるが言語の全野に及んでゐる點で空前は云ふ迄もないが絕後と云ふ稱を今日でもまだ云ふ事が出來る。標語數は天地三十一、人倫三十、動物百三十八、生植百五十七、器用七十、衣食二十二、言語は百二項で各標語の下に各地の方言が列擧してある。その地方は江戶を中心とし關東地方が最も多く、京大阪、東山道では奥州、出羽信濃、東海道で遠江、尾張、伊勢、北陸道で越後、加賀、越前、四國で土佐、九州で薩摩肥前が語數が多い。全國に亙つては居るが畿內、中國は少い。彼はあまり旅行をした事がないやうであるから此等の材料は江戶で集めたものかと思はれる。凡例に「もとより街談巷說を聞るにしたがひてしるし侍れば管見不堪の誤多からむのみ」と記してある。

安永四年は之を西暦にすれば一七七五年で十八世紀の末葉に當り西洋で漸く方言採集の機運の動き出した頃である、東西、略、その初めを同じくしながら我國の方言研究が長く振はなかつた事は慨嘆に堪へない

俳人の方言に關する第三の著述としては信濃の俳人、小林一茶の「方言雜集」をあげる事が出來る、之は信濃言葉を中心に諸國方言を併せて、いろは順に排列した半紙二つ折の手記で、原稿のまま埋もれて居つたのを信濃教育會の手で一茶叢書第二編として刊行したものである、俗語や方言を好んで俳句中に詠み込んだ一茶にこの集錄のある事は面白い。一茶の晩年のものらしいが年代は不明である。

俳人と方言書との因緣淺からぬ事は、思ふに俳人は歌人と違つて俳言を喜んで使ふものであり、方言俗語に關する意識が常人より强烈な爲ではなからうか。勿論、吾山等に方言に對する注意を喚起した原動力は江戸初期から盛となつた「古語は方言に殘る」と云ふ動機から起つた方言研究運動であつたらう。

この方言俗語の尊重は物類稱呼以外の辭書の上にも現はれてゐる。

物類稱呼刊行の翌年、卽ち安永五年に七十歳を以て歿した伊勢の谷川士淸翁の和訓栞が歿後の安永六年にその上編が發行された、卷首の大綱の中に方言の音韻に關する記事や數首の方言歌が見えてゐるが、特に俗語を集めた下編には方言がかなり多く採錄されてゐる。この下編は明治十六年に岐阜から出版されたがあまり廣く知られてゐないのは遺憾である。今日の增補語林和訓栞は上中編を改纂したもので下編は省いてある。谷川翁の和訓栞の方言記事については Pfizmaier が Über Japanischen Dialekt と題する論文で明治八年に之を泰西に紹介した。

士淸翁の歿年に先だつ事五年、安永元年を以て生れた村田了阿の編と云はれるものに俚言集覽がある。了阿は江戸淺草に生れ天保十四年に七十二歳を以て終つたが、俚言集覽を了阿が編纂したかどうかについては異說があり、中根

莆治氏は本文中に「愚案」「移山案」「方案」とある點より考へて「此書ハ初メ太田全齋其他移山ナド云人ノ編ミタルモノガ了阿ノ手ニ入リ了阿モ亦少シク遺ヲ拾ヒタルモノニハアラザルカ」の意見を出してゐる。しかし、凡例に「余江戸に生長せり故に集中江戸の語什が八九にあり楚人好説楚語なり」とあつて備後福山の太田方を編者とする事にも疑がある。書中の記事が天保に及んでゐるので其頃恐くは韻學に通じた江戸人の手によつて編纂されたものであらう、江戸語を中心とし諸國の方言をも擧げてあるが物類稱呼を引用したのも多い、書名は恐く雅言集覽に對をとつたものかと思はれる。凡例に「俚言鄕語自つから善謠あり此方古人の口より出て移徙流轉するあり亦西土載籍に原いて里巷の常言となるあり」と述べ「此集鄙俗を先として雅馴を後とし輓近を主として上古を賓とせり」と云ふによつて編者の意圖を知る事が出來る。その材料については「此集親戚僚友許多く人の口に出るものを采る」と云ひ「方言鄕語……前輩の記載に出るものは稗官野乘を厭はず」と云つてゐる。

今日活版で行はれてゐる增補俚言集覽は原本の體裁を傳へてゐない。原本は五韻横列の次第に排列してあり、ここに原著者の特異性が出てゐる。

以上述べて來た各書のやうな全國の方言を記載したものでなく一地方の方言を筆錄したものは幕末にかなり多くの稿本を見る事が出來る。江戸時代は封建制度が確立して各藩、その牆壁を堅くし隣國との交通を戒め他國人の入國を可及的に阻止したために方言の特殊性は著しく增大した。ために國人が他國に遊ぶと少なからず言語の不通を感じた、かゝる事情から江戸に上る武士で江戸語と自國の方言との比較を記すものや、江戸京阪に遊んだ他國人で三都の言葉を書き留めた手錄風のものもある。東北地方には特に多く發見される、多くは藩士や儒臣の手になつたものである。山形には明和四年堀季雄著の濱荻と氏家剛太夫の莊內方音攷がある、共に言語誌叢刊に收めてある。岩手には寛政二

年服部此右衛門の御國通辭があつて南部叢書に收めてある。宮城には特に多く享和五年の猪苗代兼郁の仙臺言葉（以呂波寄）、文政十年の贅菴の方言達用抄、櫻田虎門の仙臺方言の三書は今日、仙臺叢書に收められ、年代不明の匡子の濱荻は新に言語誌叢刊に收められ、堀田攝津守の撰と傳へられる仙臺方言は改修されて裳華房から仙臺史傳と合冊で刊行されてゐる。關東には見當らず、飛んで名古屋には寛延元年山本格安著の尾張方言と文政二年石井垂穗の水がはりと文政四年の宮訛言葉の掃溜があるが何れも寫本である（前二書は近く一の宮の土の香社から出版となる筈）、大阪には文政二年著者未詳の浪花聞書と天保十五年版の新撰大阪詞があり、丹波に年代不明の丹波通辭がある、浪花聞書と丹波通辭は古典全集中に收めてある。中國九州にはこの種のものが極めて少い。僅に山口には布施御牆の他所問答あり、島根に中村守臣の出雲音と云ふ方言關係らしい書名が見える、前者は長周叢書に收めてあるが短いもので、後者はまだ發見されない。九州には幕末のもので筑紫ことばと云ふ寫本がある、之は雜誌方言第一卷第三號に轉載してある、鹿兒島には何かありさうなものと多年探してゐるが未だ一冊も發見しない。反つて極北の松前には松前方言考と云ふものが嘉永元年に淡齋如水と云ふ人の手で著はされてゐる、之は帝國圖書館所藏の寫本である。以上を通觀するに寛延の尾張方言を初とし嘉永の松前方言考を終とし共間連續してこの種のものがかなり多く編著されてゐた事がわかる。なほ江戸の隨筆類等に見える方言記事については今一切觸れない。

○本章關係參考論文及著書

東歌にあらはれたる特殊なる語法　（奈良朝文法史）　山田孝雄　（寶文館發行）
國語に於ける東國方言の位置。東國方言沿革考　（東方言語史叢考）　新村出　（岩波書店發行）
三百餘年前の日本の方言に關する西人の研究　橋本進吉　（民族　第二卷第一號）

長崎版日葡辭書にあらはれたる方言資料　近藤國臣（方言　第一卷第二號、第二卷第二號、第五號）
片言解題（日本古典全集）　新村出（同刊行會發行）
物類稱呼、浪花聞書、丹波通辭解題（日本古典全集）　東條操（同刊行會發行）
「物類稱呼」西國方言索引　吉町義雄（文學研究　第一輯）
岩瀨文庫所藏「丹波通辭」外二種の方言稿本　東條操（國語と國文學、新資料の研究）
國語史―中央語と方言、春日政治（文獻書院發行、國文學講座）
九州方言の特異性　吉町義雄（九大國文學　第一號、第二號）

明治大正期の方言研究

大正の末年から昭和にかけて勃興した方言學界の展望を試みる前に、前章の史的敍述の筆を續けて明治時代、大正時代の研究を概觀したい。

明治の方言研究は先づ英人の手によつて起された。此等英人の方言に關する論文は Transactions of the Asiatic Society of Japan について見る事が出來る、その最初のものは一八七五年即ち明治八年の同報告第三卷に現はれた Dallas の米澤方言に關する研究である、氏は米澤の興讓館の英語の教師である、外人が日本の僻地特に東北地方の如き訛音の多い土地で教鞭をとつては方言に興味を惹かれる事は自然であるが、英國方言協會の設立が一八七三年なる事を想起すると英本國の方言研究熱が遙かに日東の米澤の英語教師を刺戟した事が想像される。爾後同報告に引續いて掲げられた方言論文の中では Chamberlain 氏が一八九五年即ち明治廿八年の報告第二十三卷の附錄別冊として

公にした琉球語研究を以て白眉とする。（筆者は琉球語を以て國語の方言なりとする見解を持つてゐるものであるが、琉球語については他に之を記す人が有ると思ふので、琉球語關係については略記するに留める。）

此等の外人の研究に刺戟されたものか明治十年以後に於て國内に方言研究の聲が段々と高まり種々なる形で表はれて來た、今之を年代順に列擧して見ると明治十一年には藝術叢誌に而讀齋主人と云ふ筆名で外國人に對しても恥しいから方言辭書を作らうと云ふ提議が載せてある。

明治十三年九月、十月の兩月には砂川雄駿、隈本尙二氏の發起で大學に於て諸國方言演說會が前後二回に亙つて開催されてゐる。同年に沖繩縣學務課から沖繩對話二冊が刊行された。

明治十七年八月、九月のかなのしるべ、第二、第三號には三宅米吉氏が「くにぐにのなまりことばにつきて」と云ふ記事を寄せ標準語制定の準備としての方言研究を慫慂してゐる。

明治十八年四月には三宅米吉氏は辻敬之、湯本武比古、岡村增太郎の諸氏と共に方言取調仲間の組織を企てた。その目的は趣意書によれば「各地方の方言を集め倂せて我國語の現時の有樣及其遷り變りの次第を究むる」にあつた。但しこの仲間が成立したかどうかは明かでない。

明治十九年には東京人類學會報告が發刊されたが、この誌上では方言の寄書を歡迎して多くの方言表を揭載した。

明治二十年には多屋梅園氏の田邊方言（和歌山縣）が公にされ爾後連年方言書が刊行され、二十一年には出雲言葉のかきよせ、二十二年に鹿兒島ことば、二十四年に莊內方言考、二十五年に越佐方言集が出てゐる、一寸變つたものでは明治二十一年に靑田節氏が福島の進振堂から方言改良論を發行した。著者は兵庫縣人で福島で小學教育に從事した人であるが方言改良の必要をとき方言改良會の設置と、學校に言語練習科を置く事を提言してゐる。

明治二十二年頃、言語取調所の黑田太久馬氏の斡旋で上田萬年、岡倉由三郎の兩氏が仙臺方言の採集旅行に上られたが之は學者の採訪の初めと見るべきものであらう。

明治二十六年岡倉由三郎氏は人類學雜誌第九十、九十一號に「方言の性質及其調査方」を掲げたが三宅米吉氏の論文を除いて方言研究の方法論を說いた最初の注意すべき論文である。

明治二十八年に大島正健氏は國民之友に「地方發音の變化及び其配布」と云ふ一文をよせ、音韻の分布より我古代民族には山陰より北陸を經て奧羽の西部に至る種族と山陽畿內に移れる種族と濃美參遠の地を經て關東より奧羽に入れる種族との三大種族のある事を推斷された。

明治二十二年に發刊した風俗畫報は早くから方言の投書をのせて居たが明治二十九年以後は言語門を設けて方言の寄書を連載し、グラスの米澤方言の如きも一七二、一七六號に譯載され、大槻博士の日本方言の分布區域に關する論文が三一八號に載せられたなど注意すべき記事や材料が少くない。

明治三十年前後に東京帝國大學では學者を各地に派して方言を調査せしめ、傍ら各地の方言集を集め、又は方言を蓄音機の蠟管に吹き込ませなどした。しかるに此等の書類、蠟管は大正の震火災にかゝつて悉く燒失したが此中には新村、保科、木村(吉澤博士)、八杉、龜田諸氏の貴重な報告書があつた。

かく明治十年頃から明治三十年に至つて徐々に發達し來つた方言研究は明治三十五年四月に國語調査委員會が設置され、同會で方言調査に着手する頃から一大躍進を見せる事となつた。卽ち、同年七月に公表された同會の調査方針中には第三項に「國語ノ音韻組織ヲ調査スルコト」第四項に「方言ヲ調査シ標準語ヲ選定スルコト」の二つが掲げてある。同會はこの調査の爲に明治卅六年九月、調査事項として音韻に關するもの卄九條、語法に關するもの卅八條を

選み之を各府縣に頒つて調査を依囑した。この調査報告書は明治卅七年四月中に調査會に到着し同會は之を整理して明治卅八年三月に音韻調査報告書一冊、音韻分布圖廿九枚を先づ刊行した。分布圖は新村、龜田兩氏、報告書は榊原、龜田兩氏が作成に當つた。續いて明治卅九年十二月に口語法調査報告書二冊、口語法分布圖卅七枚を刊行したが、この方は、分布圖は岡田（正美）、保科、新村、龜田の四氏、報告書は龜田、神田、榊原の三氏が作成に當つた、共に上田（萬年）主査委員の監督の下になされたものである。

方言の音韻や語法の全國的調査はこの時が初めてであり、その結果に於ても我國の方言區劃として從來略、考へられて居た東日本、西日本の境界線を方言事實の上から明かにした。口語法調査報告書の口語法分布圖概觀の記事の中に、分布圖に關し

> 未來ノ云ヒ方ニ於テ「うけよう」ト「うけう」ト（第二圖）「こよう」又ハ「きよう」ト「こう」ト（第三圖）「しよう」ト「せう」ト（第四圖）ノ對峙、打消ノ云ヒ方ニ於テ「ない」ト「ぬ」ト（第五圖ヨリ第七圖ニ至ル）「なかつた」ト「なんだ」ト（第八圖）「ないで」ト「いで」ト（第九圖）「なければ」ト「ねば」ト（第十圖）ノ對峙、命令ノ云ヒ方ニ於テ「ろ」ト「よ」ト「い」ト（第十三圖ヨリ第十七圖ニ至ル）ノ對峙、指定ノ云ヒ方ニ於テ「だ」ト「ぢや」ト（第十九圖）ノ對峙、活用ノ形ニ於テ「拂つた」ト「拂うた」ト（第二十二圖）「讀ました」ト「讀ませた」ト（第二十六圖）「寒く」ト「寒う」ト（第二十七圖）ノ對峙等アリ、而シテ此等ノ對峙ハ略々東西方言ノ特徴ノ對峙ト見得ベキガ如シ

と云ひ、なほ之に未來の云ひ方の「べい」を云ふ地方と云はざる地方、「出した」「指した」と云ふ地方と「出いた」「指いた」と云ふ地方との分布を併せ考へて

> 假ニ全國ノ言語區域ヲ東西ニ分タントスル時ハ大略越中、飛驒、美濃、三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方

言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ

と述べてある。なほ九州方言については

九州ニハ概シテ古キ形殘リ他ノ地方ニ普ク行ハル、新シキ形ナキ事多シ、四國ノ大部分及ビ中國ノ西部等之ニ次グ。上二段活用ノ動詞　第二十八圖）下二段活用ノ動詞（第二十九圖　受身勢相ノ助動詞「るる」（第三十圖）使役ノ助動詞ノ「さする」（第三十一圖）四段活用ノ動詞ノ受身又ハ勢相ノ形ヲ約メテ下一段ニ云フモノ（第三十七圖）等ハ主トシテ九州ニ於テ正シク行ハル、コト後項別ニ說クガ如シ他ノ地方ニ於テハ此等ノ形ハ一般ニ一段ノ活用ニ移リ又之ト相混ズ、漢語ヲ佐行變格ニ活カセテ更ニ或ルモノヲ四段活用又ハ上一段活用ニ轉ズルコトハ他地方ニ於テ一般ニ見ル所ナレドモ九州ニテハ此ノ新シキ云ヒ方ヲ爲サザルガ如シ（第三十四圖、及ビ第三十五圖）「です」「だす」ノ類ハ九州及ビ四國ノ大部分中國ノ西部等ニハ行ハレズ（第二十圖）……又打消ノ過去ノ云ヒ方ニ於テ九州及ビ島根縣等ニテハ「なんだ」「なかつた」ノ孰レモ云ハズ（第八圖）「ざつた」「んだつた」「んぢやつた」ノ類ヲ云フコト多シ。

と云ひ、なほ九州方言と東北方言とに一致のある事をも指摘してゐる。

この口語法調査報告書の大要は文部省發行の口語法別記中に巧に採錄され之と言語の史的變遷との關係が對照されるやうにたつてゐる。

音韻の方は報告者に音韻の素養の不足なために所期の效果は收め得なかつたやうである。それでも次のやうな重要な事實が分つた。之は前に述べた大島正健氏の論文と對照すると興味深いものである。

一、字音ノ「エ」列長音（ē）ヲ發音スル地方ハ同二重音（ei）ヲ發音スル地方ヨリモ甚廣シ、但シ其二重音ハ西南部ニ分布セルヲ見ル（第六圖）

一、「ガ」行鼻音ハ兵庫縣及ビ德島縣ヲ界トシ其以東ニ廣ク行ハル只新潟縣ヨリ東南一帶群馬、栃木、埼玉、千葉ノ

數縣ニ亙ル地方ニ於テ地續キニ此音ノ缺ケタルヲ見ル（第二十五圖、第二十六圖）

一、「カ」「クワ」ノ區別ハ西南部及ビ北方沿海ノ一帶ニ行ハレ其範圍ハ狹シトセザレドモ猶區別ヲ失ヒタル範圍ニ比シテハ小ナリトス（第二十七圖）

一、「ジ」「ヂ」ノ區別ノ行ハルル範圍ハ僅ニ九州及ビ四國ノ一部分ニ局シ全國多クハ「ジ」ヲノミ發音スルモノノ如シ、然レドモ二音ノ區別消滅シテ其結果「ジ」ニ歸セシカ「ヂ」ニ歸セシカハ尙一層周密ナル研究ヲ要スルコトナリ（「ズ」「ヅ」ノ區別亦同ジ）（第二十八圖、第二十九圖）

語法の側にも係結の殘存や動詞の活用の古形などを西部地方に認める事が出來て、之を以上の音韻現象と併せて考へると國語の史的變遷の迹を察する事が出來る。かくの如く調査委員會の調査は相當な效果を收めたのであるが、報告が府縣單位の爲にその繁簡が一樣でなく、全縣を一區劃としたものも、數區劃に分けたものもあり不統一であつた。特に東北地方で靑森、秋田、宮城、關東地方で栃木、千葉、神奈川、中部地方で、山梨、長野、靜岡、岐阜、石川、福井、近畿地方で兵庫、三重、中國地方で鳥取、山口、四國地方で德島、高知、九州地方で熊本、鹿兒島等の諸縣は報告が頗る簡單である。國語調査委員會は更に市郡單位の精査を試みるために明治四十一年三月、「音韻取調ニ關スル事項」四十一條、「口語法取調ニ關スル事項」九十條を印刷し之を再び府縣に委囑した、この報告書は約九百通の多きに上り岡田（正美）氏主査となり荒木、東條の二名がその整理に當つたが大正二年、行政整理のために委員會官制は廢止となり從つてその調査は一時中止の止むなきに至つた。その後大正五年六月、國語調査事務が文部省普通學務局で取扱はれるやうになつてからこの方言調査も東條、湯澤の二名の手によつて繼續され、傍ら方言語彙も山本氏によつて蒐集されカード式で整理される事となつた。之を監督されたのは調査主任の保科氏である。

かくて音韻分布圖約二百枚、口語法分布圖約三百五十枚の外に音韻及口語法調査報告書も脫稿したが、何分にも浩瀚な爲に印刷の運びに到らぬ中に大正十二年の震火災にその資料たる府縣の報告書と共に悉く燒亡してしまつた。かくて明治四十年時代の方言の狀態を知るべき貴き記錄は永遠に失はれてしまつたのである。

國語調査委員會の手によつて編纂されたものになほ、方言採集簿がある。之は明治三十七年十月に保科氏の擔任で編まれたもので外國の類書を參考して約三百頁の小册子としたものである。標識語は名詞を（一）天文地理、（二）博物、（三）人倫、（四）身體、（五）衣食住、（六）神佛人事、（七）殖產工業、（八）運輸交通、（九）雜の九門とし更に之を門每に細別し、以下、代名詞、數詞、形容詞、動詞、副詞、接續詞、助詞、呼掛返事並に感動の語、動詞形容詞の活用形、助動詞の活用形、時法等の言ひあらはし方、待遇上諸種の云ひあらはし方、語詞の組立方を記入するやうに工夫してある、我國最初の採集簿であるだけに、この採集簿は數版を重ね大に採集者に利用された。

以上の如き調査委員會の方言調査事業に刺戟されて各府縣にも當時方言研究熱が起つた事はこの前後に方言刊行物の激增を見た事實でも分る。

明治の末年に現れた刊行物の中に伊澤修二氏の東北發音矯正法がある。之は伊澤氏が當時、東北地方に招聘され各所の講習會で發音矯正を指導したその體驗の結晶である。明治四十五年七月東京帝國大學に於て行はれた講習會で藤岡教授が新しき音聲學の立場から主として東北人の發音矯正の指導をされた、之は教授が東北地方を視察し伊澤式發音矯正の弊を認めた結果、この講習會となつたのである。しかし伊澤氏の東北及出雲に於ける發音矯正事業も沒すべからざる功績である。なほ、講習會では明治卅五年帝大に開催された保科氏の方言に關する講演は古いものである。

國語調査委員會の廢止が影響したものか、明治末期から大正初期にわたつて方言研究はやゝ頓挫を見せた。

○本章關係參考論文及著書

明治期の方言研究　吉田澄夫（國語教育　第十六卷第九號）

チェンバレン氏の琉球語研究　吉田澄夫（言語と文學　第六輯）

方言研究と方言文學　東條操（日本文學講座―科外講話）

音韻漫錄　大島正健（內外出版協會發行）

口語法別記　國語調査委員會（國定教科書共同販賣所發行）

現代方言學界の展望

昭和に至つて第二回目の春を迎へた方言研究も決して俄に咲いた空花ではない、之には柳田國男氏が根を培ひ水を灌いだ多年の苦心と、その成長を助けた時運の惠みもあつて、その萌芽は早く大正の初年に見る事が出來る。

大正初年の事實を數へて見よう。

大正三年に來朝した露人 Poliwanov の方言のアクセント調査は我國の方言學のためにも音聲學のためにも忘るべからざる貢獻である、アクセントについては明治に於ては山田武太郞（美妙齋）氏の音調論とその日本大辭書におけるアクセント表記に先づ敬意を拂はないわけには行かない。山田氏は方言にもかなり興味をもつてゐたやうで、方言に關する書物をかなり集めてゐたやうである。しかし、氏にも方言のアクセントに關する研究はない。

大正三年は西暦一九一四年で歐洲大戰の第一年である、特にポリワノフの來朝したのは露西亞がその國境を獨逸軍に脅されて苦戰して居つた頃であつた、彼はペテログラード大學の暑中休暇を利用して日本語のアクセント研究に志

し、東京語から青森、秋田、京都、土佐、長崎の諸方言へと手を伸ばした。その翌年も再び來朝して研究を續行し、その成果は東京語の樂的アクセントと長崎縣西彼杵郡三重村方言の二冊となつて露文で發行された、特に後者には日本方言資料第一冊と云ふ文字が添へてある、第二冊は現はれなかつたらしいけれどその志は壯なりとせねばならない。國語のアクセント研究はその時の氏の協同調査者なる佐久間鼎氏によつて其後大成されたが氏がポリワノフ氏の研究によつて刺戟された事は少くなかつた事と思ふ。

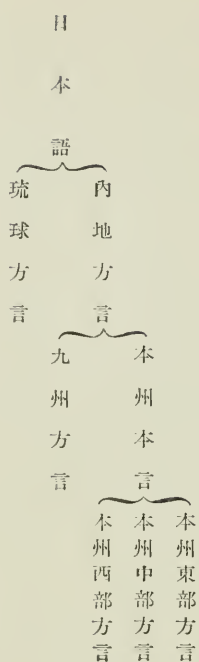
大正六年八月の東京帝國大學夏期講習會に於て上田萬年教授は方言の研究法に關する講義を開講し泰西に於ける研究法を紹介した。

大正五年四月發行の鄕土研究第四巻第一號に方言欄が設けられた。之は昭和に於ける柳田國男氏の方言研究を豫報するものとして大に注意すべきものである。その方言欄を設けた氏の挨拶の中に

私などの方言趣味は研究と云ふよりも道樂であつた、古い歌や文章を見ると時代が後になる程却つて語彙の分量が減退して居るのは爭はれぬ事實である……殊に著しいのは地理學上の用語である、京都にも近くに山も川もあるが山川で生活する人が無かつた、少なくも言語を後世に殘した人には細かな山川の名稱が無關係であつた、それ故に中世以後に成つた語彙には地形を表はす語が驚くべく乏しい、……而も田舍に行つて見ると大小殆ど凡ての地形には各名稱がある、そこで自分は曾て地名を多く集めて文藝中心地で滅びた多くの日本語を復活させやうと試みたことがある、……之を再び世中へ出して用ゐる前には各地方の方言を比較して見る必要があつたがまだ力の及ばぬ部分が多い。

と云はれてゐる。柳田氏が地形の方言に興味を持たれたのは何時からか分らないが、澤山のカードを整理し、その結果を發表されたのは明治四十三年二月以後の事で「地名雜考」と云ふ論文を歷史地理第十五巻二號より大正二年八月

の第二十卷二號まで連載されてゐる、大正元年の地學雜誌にも「地名の話」が十月より十二月に亙つて續載された。この鄕土研究の方言欄では地名の外に風の名、私有財產、勞力交換などの方言がよく論じられた、鄕土研究は大正六年三月を以て休刊となり、その後身と見るべき民族は大正十四年十一月に創刊されたが、その間に折口信夫氏が編輯した土俗と傳說が大正七年八月から大正八年一月までに四冊出て之にも方言欄が設けてあつた。

「民族」が誕生した頃は日本の民俗學の早春であつた、後に民俗學概論を譯された岡正雄氏が第一卷第一號に民俗學の目的を Rivers のものから譯載したやうに、方言に關する論文にも方言學を一般に紹介するやうな論文が載せられた。小林英夫氏が第三卷第三號に載せた「方言學・その理論と實際」の一文は Dauzat によつて言語地理學の概念を說いたものである。橋本進吉氏も前に述べたロドリーゲスの紹介の外に、第三卷第四號に「歷史上から觀た日本の方言區劃」を書かれた、之は或る意味では昭和二年三月に著した東條の國語の方言區劃に對する一つの批評でもあつた。卽ち國語の方言區劃で東條は次の如き區劃を公にしてゐたのである。

九州方言にジヂズヅの區別のある事、本州のオ母音がウ母音に多く轉じて居る事、動詞、助動詞の活用に二段活の殘れる事、形容詞に特異なる「カ」形の活用の存する事、係結の殘れる事、一言にして云へば室町時代以前の言語の

彿がなほ九州方言に殘存する點から、以上の諸點を分類の標準として九州と本州とを對立させたものであるが、之に對して橋本氏は次の如く云はれてゐる。

古代に於ては東西兩部方言の差異は九州方言と本州方言との差異に比して遙に顯著であつて九州方言は西部方言中の一部分と見た方が穩當ではあるまいかと想はれる。室町時代に至つては九州方言と上方の方言との間にかなり著しい相違があつたのであるが、それでも東國方言に對してみればこの兩方言の間に多くの共通點を有つてゐたものと想はれる。……然るに室町時代以後本州諸方言に於てジとヂ、ズとヅの區別がなくなり、二段活用が一段に變化した爲、九州方言と本州方言との差異が多くなり、九州方言が日本の方言區劃上、獨自の地位を要求するにいたつたのである。

この史的考察から云ふと歷史の上では東西兩部方言の對立は九州方言と本州方言との對立よりも一層明瞭であり一層根本的であると結んである。

この史的考察については恐く誰も異論はあるまい、要は現代の方言の實際に基いて見た時九州方言の位置はどうなるかと云ふ點に歸着し橋本氏も之については意見を述べて居ない。方言分類の標準に何をとるかと云ふ事がこの問題の解決となるであらう。

東條の國語の方言區劃は同人の大日本方言地圖の說明書である。この地圖は大正十五年七月、靜岡高等學校に於て文部講習の開かれた時「古代語と方言」の題下で東條が講義した時に使用した方言區劃圖を版にしたものである。

この地圖及說明書に於て東條は方言區劃の細分を提案して見た、卽ち、本州東部方言と本州西部方言の間に中間地帶の本州中部方言を新定し、九州方言と合せて四大方言區を考へ、各大方言區を夫々、若干の小方言區に分けたのである。本州東部方言を先づ東北方言と關東方言とに分ける。東北方言に現はれる多くの訛音現象は南下するに從つて

その色彩が薄くなり關東方言に於て殆どその痕跡だけとなる、しかも所謂「關東べい」は東北地方にも行はれてゐる、この東北方言は日本海沿岸卽ち出羽方言と太平洋沿岸卽ち三陸方言とに大略は分ち得るやうであるが出羽方言と三陸方言との相違は後に述べる九州の三方言間の差異ほど明瞭でない。八丈島は關東方言に大體、屬するやうであるがまだ十分に系統は分らない。

本州中部方言は之を北陸方言と東海東山方言とに分ける、東西兩方言の混合地帶であるが北陸方言には西部方言の色彩が濃厚である。

本州西部方言は近畿方言、瀨戶內海方言、雲伯方言、土佐方言に分ける。近畿方言は訛音が少く二重母音などの變化も少い、一音節語を長呼する傾向などがある、ここには「どす」「おす」の京都と「だす」「おます」の大阪の二中心がある。瀨戶內海方言とは雲伯方言、土佐方言を除いた中國四國の方言で、二重母音の變化や、「と」拔け現象や「さかい」の代りに「けに」「きに」の助詞が現はれ、「ざつた」が「なんだ」と混じて現はれたりする。この中で四國方言には近畿方言の影響が多い。雲伯方言は出雲を中心とする地方で東北地方に類した訛音があり、語法にも東部方言に似たものがある。土佐方言は四國方言の一變種であるが「ジ」「ヂ」「ズ」「ヅ」の區別など九州方言に近い點もある。島嶼部では瀨戶內海の島嶼の方言の性質や、隱岐の方言の所屬などに問題がある。隱岐は出雲に近く石見に遠いやうで或は雲伯方言に加ふべきものかも知れない。なほ調査して見たい。

九州方言は之を豐日方言、肥筑方言、薩隅方言に分ける、この中では薩隅方言と肥筑方言とは類似が多いが薩隅方言では入聲の語尾や、短呼の傾向が著しい。豐日方言には「甘か」の如き「か」形の形容詞が行はれて居ない、二重母音の變化にも相違がある。薩南諸島中、奄美大島及屬島は琉球系統であるが、その以北は大體、九州方言に加へて

よからう。九州にも多くの島々があつて、かなり特殊な方言が行はれてゐる、種子島なども薩摩とはかなり異なつてゐる。東條が大日本方言地圖と國語の方言區劃とを育英書院から發行したのは昭和二年であるが、柳田國男氏はこの昭和二年に於て多くの注意すべき論文を學界に送つてゐる、まづ民族には第二卷第三號の「地名考說」を初めとし每號方言記事を執筆し昭和三年の第三卷第三號以下の「方言の小研究」に及んでゐる。けれども柳田氏は寧ろ、社會の各方面に方言の趣味を鼓吹する事に一層努められたと見えてその論文は各種の刊行物に散見する、アサヒグラフには四月より十月に亙り「方言と昔」を二十九回にわたつて連載し、同じ四月より七月まで人類學雜誌に「蝸牛考」を寄せ、六月より八月まで斯民に「農民史研究」の一部を、七月より九月まで近代風景に「民間些事」を、九月より十一月まで信濃教育に「小さきものの聲」を矢繼早に連載されてゐる。いづれも多年の蘊蓄を傾けられたもので再讀三讀すべき滋味と示唆と創見に富む論文である、就中、後日、改訂の上、言語誌叢刊中に收めた「蝸牛考」は彼のジィエロン氏の一九一八年の「蜜蜂を指示する單語の系譜」にもまさる名論文で、扱つたのは蝸牛の方言に過ぎないが之によつて語詞發生の理法を具體的に剖檢して見せ、最後に「方言周圈論」に及んだ。金田一氏は之を紹介して「柳田先生の蝸牛考は方言研究の究極の典例を示す」と云ひ「一卷を讀み終へてたゞ驚嘆するのは博大な知識と之を綜合する驚くべき想像力の威力である」と云ひ「一篇の國語史が同時に言語心理學の領域に入つて一般原理の考察となり方言の研究が直ちに言語學の理論を衝いてゐる」と賞揚した、氏はその內容については

初の三章「言語の時代差と地方差」「四つの事實」「方言出現の遲速」は要するに緒論であり四章目の「デンデンムシの領域」から第一の京都方言デデムシ系の諸名稱の考證に入る、そしてそれが次の「童詞と新語發生」「二種の蝸牛の唄」「方言轉訛の誘因」まで行つて解決される。次の「マイマイ領域」から第二の東京方言のマイマイツボロの系統の諸名稱の考證に入つて、

それが次の「その種々なる複合形」「蛞蝓と蝸牛」「語感の推移」「命名は興味から」まで行つて解釋がつく。次の「上代人の誤謬」の章は第三のカタツムリ系それはカサツブリの意味だつたといふ語原の考究に入つて、次の「單純から複雜へ」と「語音分化」の章が卽ち第四のツブリ系―それはツブラと關係がある―卽ちツブラの語義が說明せられ、その變種のタマグラは次章の「訛語と方言」の條で論ぜられ、最後にツグラメのメ、シタタミのミといふ語尾の語原が蜷（ニナ、ミナ）だといふことが「東北と西南と」「都府生活と言語」「物の名と智識」の條で說明されてゐる、第五系のナメクジに就ては前の「蛞蝓と蝸牛」の章で論究されてゐるのでこれで五種の名稱が片がついて一篇の結論は卽ち結末の一章「方言周圈論」がそれである。

さて本書の結論なる方言周圈論は所謂方言區劃を否定し新に方言周圏の說を述べたものである。柳田氏は云ふと要領よく紹介されてゐる。この「蝸牛考」には終りに色刷の蝸牛異稱分布圖がついてゐる。

私の考へるには若し日本が此樣な細長い島でなかつたら方言は大凡近畿をぶんまはしの中心として段々に幾つかの圈を描いたことであらう、從つて或方面の一本の境線を見出してこれを以て南北を分割させようとする試みは不安全である、同時に南海の島々と奥羽の端とを比較して見ることが至つて大切であり、又土佐や熊野や能登の珠洲の如き半島突角の言語現象は殊に注意を拂ふべき資料であると信ずる、何となれば我々の想像の圓周は往々にして斯んなあたりを今一度通過して居るかも知れぬからである（人類學雜誌第四十二卷第五號）

改訂前の「蝸牛考」中のこの文をここに引いたのは方言周圏論と云ふ名目を最も容易に理解させ得るからである。各地方に行はれる單語は夫々、獨特な領域をもつて居り、その等語線は夫々特有な形を持つが故に方言區劃なるものは單語各語の上にはあつても、之をまとめて重ね寫眞のやうな效果を方言の上に認める事は出來ない、方言區劃と云ふが如きは幽靈の如き存在であつて其はたゞ學者の架空の想像にとどまると云ふやうな言語地理學派の主張と、柳田氏の方言周圏論とは類似點はあつても必ずしも一致するものとは思はれない。氏の周圏を形づくる波の形も恐く一樣の

圓でなく出入のかたり不規則なものと想像されるけれど東北と西南との一致を說かれる事などから思へば、一の中心からほゞ等距離の地點に類似方言の存在を豫想されるものでかたり規則的な圓周かと思はれる。然らば之も一種の方言區劃論である。言語の波動的傳播を說かれるあたりは所謂改新波の說に通じ、Schmidt 等の Wellen Theorie とも合し、之はまた今日誰にも異說のあるべき說でない。要は從來の如き方言區劃の設定は無用か否かの問題となる。

佛蘭西派は單語に立脚するがために方言區劃の如きはこれを無用とし、更に進んで區劃設定を不可能なりと云ふ。一體に新陳代謝の盛な、また非常に多種な方言分裂をする單語を基準にとつて考へればこの論も一應は道理である、言語の史的變遷の上に例をとつても各單語の生命は區々であつて或るものは萬葉の古から今に及び、或るものは明治に起つて今日既に死語となつてゐる、この單語の上のみから考へる時、國語史の時代區分が一見、立たないのと同樣である。しかし、この基準を語法にとり音韻にとる時は自ら別た觀點が生じて來る。現に東西兩方言の對峙は語法事實から歸納したもので之は机上の空論でない。音韻の分布については大島氏も、伊澤氏も、はた國語調査委員會の調査に於てもほゞ同一の區劃の存在を立證してゐる。

若し、この音韻、語法それに單語の分布事實をも加味して或る方言區劃が考へられるなら、區劃を立てる事は必ずしも無理でも無用でもなくむしろ、甚だ便利な場合があらうと思ふ。之は史的考察に於て奈良朝文法、平安朝文法等と分ける便宜と同じものである。なほ、この區劃決定の可能を思はせる事は各地方人の主觀に方言區劃の映じてゐる事であり、また事實についてもこの主觀の根據を相當立證する事も出來る、東西方言の境界線が古來あまり異動して居ない事實なども之を裏書するものではあるまいか。但し言語の變化は突然に起るものでたく連續的に漸及的に起るのが常であるから、ある一地點やある線を境界とする事は勿論、便宜上の手段にすぎない。方言區劃否定の聲の高い

今日、序を以て讀者の判斷をまつ次第である。

却說、昭和二年に於ける柳田氏の諸論文は全國各地に非常なる反響を起し、鄉土研究者又は民俗學者にして爾來、熱心なる方言研究者となつたものも少くなく、各地の鄉土雜誌は爭つて方言記事をのせ、方言特輯號を發行した、それらの詳細は他の機會に讓つて省筆するが昭和に於ける方言研究勃興の原動力は一に柳田氏にあつたと云つて過言でない、氏の學界に於ける勢力にあらずんば學界にこれだけの新運動を起し得たとは思はれない。尤も、之を助くべき二三の事實はなほ數へられないでもない。

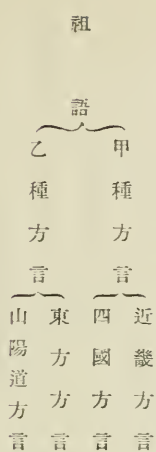
その中で第一にあぐべきものは昭和初年に於て佛蘭西風の言語學が紹介された事である。特に昭和三年の小林英夫氏の Saussure の言語學原理の譯出は方言學を學ぶものに多大の參考となつた。本書によつて所謂、共時言語學と通時言語學の別が明瞭となり、地理言語學の概念も會得する事が出來る。

第二にあぐべきは民俗學の進步と鄉土研究の流行である。方言研究の補助學科として民俗學的知識の必要な事は云ふまでもないが、近來、この方面に良書、良雜誌の刊行の多い事は喜ぶべき事である。また、政府が近頃特に鄉土研究を奬勵することも、方言研究にとつては幸な事である。

第三にあぐべきは國語音聲學の發達である。明治に於てはなほ直譯を免れなかつた國語音聲學も佐久間、神保氏等の努力によつて漸く外國の Phonetics より獨立する域に達し、昭和四年には日本音聲學の如き大部の學書を有するに至つた。更に特筆すべきは音聲學協會の設立された事である。本會は石黑魯平、三宅武郞氏等の盡力の結果、大正十五年十月創立され上田萬年博士を會長に藤岡、新村兩博士を副會長とし日本語及日本領土內の言語の音聲を研究するを目的とする、從つて方言方音を調査する事を一事業とし、方言に關する記事はその機關誌、音聲學協會々報誌上に

掲げられる外、年刊の「音聲の研究」には特に方言研究の一欄を設け有益なる論文、報告を發表してゐる。その外、例會に於て親しく方音を地方人より聽取して之を研究する機會を作り既に秋田、土佐等の方音を聽取してゐる。

この側から、從來頗る缺點の多かつた方言の音韻的研究が學的に行はれて來た事は大なる進歩である、特に服部四郎氏等の各地方言のアクセント研究は注目すべきもので服部氏は「音聲の研究」や雜誌「方言」の誌上にその研究を寄せられてゐる。氏によれば近畿アクセントと東方アクセントとの境界線は靜岡愛知の所謂東西方言境界線より西の愛知三重間の揖斐川の線にありと云ふ、なほ氏はアクセントを以て語法形式より更に固定的に根本的なる言語分類の標準とし之によつて方言區劃説に一つの新説を提議し次の如き假説を出してゐる。

- 祖語
  - 甲種方言
    - 近畿方言
    - 四國方言
  - 乙種方言
    - 東方方言
    - 山陽道方言

東北方言、九州方言については精査をしてないが特別な位置をもつものかと云ふ推定を發表してゐる。

次に最近の方言學界の消息をスケッチして本章を終りたい。

方言學會の中で最も早く設けられたのは東京帝國大學文學部國語研究室内の方言研究會である。この會は昭和三年十二月、柳田氏の發起により、東京朝日新聞社樓上で開かれた東條の方言採集手帖出版の記念會の席上で成立したもので、當夜は上田博士、藤岡博士も列席されて居られた。

昭和五年五月には東京文理科大學内に東京文理科大學方言研究會が生れ、翌六年五月には廣島文理科大學内に廣島

方言學會、京都帝國大學文學部内に近畿國語方言學會、東京の國學院大學内に國學院大學方言研究會が生まれた。

最近に於ける方言關係の刊行書の激增は意想外であるが之は姑く置き、方言に關する叢書風のもののみの主要な發行所をあげても盛岡市　橘氏の一言社、千葉市川、本山氏の日本民俗研究會、東京市　岡村氏の鄕土研究社、岡山市桂氏の岡山文獻研究會、福岡市　梅林氏の土俗玩具研究會の多きに上り、目下休刊してゐるが富山市大田榮太郎氏の方言集覽稿の如きものもある。以上は鄕土研究社のものを除いては謄寫版印行である。この類の中の白眉とも云ふべきは刀江書院發行の言語誌叢刊である。之は藤岡、新村、柳田の三氏の發起で昭和五年から發刊されたもので、日本各地方の方言並びに東方諸民族の言語に關する調査研究を世に紹介せんとするもので第一期、第二期各四冊づつ併せて八冊を既に公刊してゐる。

言語誌叢刊の如き純學術書が叢書體で續刊されることは全く聖代の惠澤であるが、方言のみを內容とする雜誌「方言」が春陽堂から月刊約八十頁の分量を以て發賣されてゐることも、他に國語又は言語專門の雜誌の一冊も出て居ない我國の現狀では寧ろ不思議なくらゐである。本誌は東京方言學會（前に述べた東京帝大の方言研究會の改稱）の幹部と春陽堂との合議の結果、昭和六年九月より創刊されたものである。地方に於ける謄寫版の方言雜誌には盛岡市の一言社から方言と土俗が昭和五年八月から刊行され既に第二卷を終り第三卷第一號を發行し二十五冊を出してゐる。その他、富山滑川町の金森氏は昭和六年七月から越中方言研究彙報を發行し、福島郡山市の山下氏は同年十月より方言と國文學を、愛媛縣壬生川町の杉山氏はいよのことばを印行頒布してゐる。

ラヂオ放送では昭和五年八月の「ことばの講座」で東條が方言について放送した外に、名古屋の放送局で春日井氏は「尾張の方言」について放送し、特に日本放送協會九州支部の計畫で昭和五年の十月より昭和六年三月まで十名の

講師によつて「九州方言講座」を放送された事は特筆してよい、これは熊本放送局の法川氏の盡力によるものと聞いてゐる。廣島放送局にもある計畫があつたが沙汰止となつた。

方言の研究が學界の注目を惹くとともに帝國學士院や啓明會が方言研究者に對して補助金を交付する件數も漸く加はり、又、東洋文庫が宮良氏の八重山語彙を刊行するなど有力な財團がこの方面に後援する事は學界の慶事である、いつか日本方言大辭典の編纂がかゝる方面の助成によつて實現される日を期待したい。

近年、若き學徒で方言研究をその研究題目とするものの年毎に加はつて來た事は若き日本方言學の前途を約束するものである。（伊波、宮良兩氏の琉球語研究、小倉博士の朝鮮方言研究については、ここに割愛する。）

〇本章關係參考論文及著書

刊行方言書目　東條操（國語教育　第十六卷第九號　方言研究號）

方言研究の過去現在未來　橋正一（國學院雜誌　昭和六年二月號）

昭和方言研究の三大特質　東條操（國語教育　第十六卷第五號）

最近の方言研究について　東條操（書物展望　昭和六年十一月號）

方言周圏論について　橋正一（方言と土俗　第二卷第十二號）

近畿アクセントと東方アクセントとの境界線　服部四郎（音聲の研究　第三輯）

國語諸方言のアクセント概觀　服部四郎（方言　第一卷第一、第三、第四號、第二卷第二、第四號、未完）

放送講演集　九州方言講座（日本放送協會九州支部發行）

方言研究法私見

方言研究も言語研究の特殊な場合であるからその研究法も一般の言語研究法と大同小異である。たゞ、その資料が文獻よりは活きた口語を主要なものとする點で、文獻を主要な資料とする文語などの研究と違ふ。尤も、方言研究にも既存の方言集や他人の報告などを材料とする場合も多い、この時に要する注意は一般の文獻による言語調査の場合と同じものである、卽ち、第一に、その表記法を通して眞の發音を洞察することが肝腎で、その表記法の性質を正確につかむ事が大切である。第二には誤記や脫字の有無を發見することであり、第三には說明や注記の意味を正解することである。これ等は皆、かなり困難な仕事である。國文學の方で考勘の作業によつて本文批評が行はれるやうに、同一地方の文獻を澤山に集めて比較するか、その地方の人に正否を質問する以外にあまり良い方法はない。前代の方言を研究するには文獻による外の手段は考へられないので之は仕方がないが、現代の方言を調査するなら出來るだけ臨地調査によるべきもので、文獻による調査は止むを得ない場合の補助手段としたい。

實際の言葉を聞いて之を記錄する場合を考へて見る。自己の鄕里の言葉は內省によつて不十分ながら書留める事も出來るが、他地方の方言は、之をその地方人に求める外はない。この場合に鄕里を遠く離れてゐる地方人から純粹な方言を聞かうとするのは無理である、鄕里の言葉も他地方に居ては思出す事の豫想外に困難な事は誰しも經驗する事である、東京は全國各地の人の集まつてゐる所であるから、東京に居て全國の方言をその地方人から採集する事は不可能ではないが、その多くは不純な歪んだものである事を先づ知らねばならぬ。

そこで純粹な方言を知るためには、その地方まで出かけて、その土地の雰圍氣に十分ひたる必要がある。さうして、その方言を自分にも使へる位になつてから地方人と接觸しながら、自然に採集するのが最も理想的である。また、採集するにはなるべく自然の狀態で採集するのが理想であるから、地方人同志が憚るところなく高談放語するところを

物蔭に居て速記する事ができれば、最も妙である。（但し途上や車中で採集する時には、話者が果してその地方人であるかどうかを一應確かめないと往々、他郷の旅行者などをその地方人と誤る事もある、汽車中の採集などには特にこの注意が必要である。）

かうした自然の採集を多く累積して、その中から音韻、語法の法則を一通り歸納的にまとめる事が出來、また各方面の土語をも蒐集し得れば最善の採集である。しかし、之は短時日の旅行では望めない事で、そこに移住するか、又はかなり長く滯在して初めて可能な方法である。

從つて、短時日の中にその方言の輪郭だけでも眺めたいと考へる時には、次の如き便宜的な方法でも採る外はないのである。卽ち、採集者は旅行に先立つて先づ調査の準備をする。第一にはその地方の方言書や隣接各地の方言書を精讀してその方言の大體に通じると同時に調査事項、質問事項を整理する。萬一、資料の少い場合には、その地の教育會や師範學校などに照會して、之を得ることが出來よう。

第二に調査地點を選定し、その旅行の日程を定める事である、この地點を定め兼ねる場合には、その地方人について言語の中心地を尋ねればよい、國界や、舊藩領域や、山川の分布狀態や、交通路線などがその參考資料とならう。

第三には旣刊の方言採集簿とか、方言採集手帖とか云ふものを携帶することである、之は全國向に作られて居るので、或る地方には必ずしも適切とは云へないが全國的に變異の多い方言は多く集まつてゐるので參考にならう。

次には愈、その地方に乘込んで適當な話者を求める事となるが、この選定は頗る困難である、知識階級でない下層の人ほど純粹な方言を使ふわけであるが、此等の人に質問條項などをつきつける事は勞多くして得るところが少い、この方面は自然採集が利くだけである。例へば漁師に舟の名稱とか、魚の方言とか、漁具とか、天象に關するものと

かを實物を指して教へをうける程度である、之も調査者が碎けて出ないと中々話して呉れない、「語らせ上手」でないとむづかしい。これは全く技術である。

老人もよい話者である。しかし、一般に話者の云ふ事の悉くをそのまま信用する事は出來ぬ者であるが、話者が老人である場合に於て特にさうである。老人に惡氣はなくとも忘れたと云ひ兼ねる意地もあれば記憶の誤りもある。

女もよい話者であるが、女學生や旅館の女中は、新しい言葉の持主で話者たる資格が乏しい、また女は一般に恥らひ勝で多人數の同性と一緒ででもないと語らない場合が多い。

話者として適當な老人や、婦人や、農夫漁師などの人々を十分に利用できないとなると多くの採集者は小學教員を話者に選定する。小學校の訓導はその地方生れであり、國語に關する理解もあり、時には方言に關する興味をもつてゐる人も少くない、從つてかなり立派な話者と云へる。一般に方言に關心をもつ人を發見できたら採集者の非常な幸福である、かう云ふ人からは意外に澤山の材料を供給され、貴重な事實を教へられる場合がある。採集者は虛心に此等の話者の云ふ事を聞き、忠實に之を記錄すべきであるが、同時に、話者の方言はその話者の方言に止まる事をも注意しなければいけない。一村に三人の話者があつて、その云ふところに矛盾があつても怪しむに足りない。各人の言語經驗は相違してゐるわけであるからAの知らざる所をBが知り、Bの知らざるところをCが知ると云ふ如き事は極めて多い、この理由から話者は多い程結構である、師範學校の生徒の利用などは周到な注意の下に行へばよい結果を得る。

質問事項は具體的なものを選み抽象的な法則的なものを避ける必要がある。文法の素養のある話者などは兎角、法則的な事實を教へてくれる場合が多いが、之はたゞ參考の程度で聽取すべきである。話者にあまり學問があると言語

法則を獨斷的に立てて之を固執する弊がないでもない。

話者の選擇はかく困難である、之をして自由に純粹な方言を語らせる事は一層困難であり、之を如實に記錄する事は更に困難である　學者は必ずしもよき採集者ではない。ジイエロンが、音の表記に巧に話術の妙を得たエドモンを協力者とした所以である。

短時日の方言採集を成功に導くためには、よく選ばれたる地點に於て、よく選ばれたる話者に、よく選ばれたる質問事項を、自由に答へさせて之を正確に表記する事が必要な條件である。言語地理學的調査に於ては、地點、話者、質問事項の選定と表記法の正否とが、その調査の運命を決する次第である。

臨地調査によらないで書面の照會によつて回答を求める場合にもこの四つの條件はその調査の成功か失敗かを決定する。

質問條項は全國一齊に調査すべき重要な調査事項と、その地點に適切なる特殊の調査事項とから成る事が望ましい。調査地點はその地方の各小方言の中心地の外、交通路に沿つて定めたい。その他、國境附近は特に精査する必要があり、離れ里や海島は必ず、落してはならない。

話者即ち回答者には小學校訓導や町村役場吏員を選むのが無難であらう、之も他に篤志家のある場合は別である。

表記文字としては世界音標文字を推奬するわけであるが、音聲學の知識のない採集者は片假名を使用し、特殊な音に平假名を用ゐたらどうかと思ふ。

以上の如き用意の下に行はれる方言調査は言語地理學的調査としては先づ滿足すべきものとなるであらう。

言語地理學的な調査でなく、一地方の言語現象を洩れなく記載しようとする本來の方言學の立場に立つと之はその

地方人を除いては完全な調査は望めない。如何なる語學者と雖も僅かな日子では一地方の言語現象を細かく觀察し得るものではない。その地方に生れ、多年その地方に暮らしてその地方の自然や人事に通じて居る地方人にして初めて完全な蒐集が出來るわけである。

多年、方言を集めてゐる地方人であつても、相當な素養と言語に關する深い觀察がなければ、專門家の短時日の調査に及ばない場合がある。その素養と云ふのは音聲學と語法學とを中心とし、之に民俗學の知識があればまづ相當と考へる。勿論、言語を採集する事であるから、博大な知識の持主なればなる程精細な觀察が出來るわけである、天象の方言を集めるには天文學の知識のある人がよく、動植物の方言を集めるには博物學の知識のある人なれば一層よい、此等の知識はあればある程よいが無ければ無くても我慢が出來る、然るに音聲學の知識と語法學の知識とを持たぬ人の採集は言語調査としての價値が乏しい。之を植物の採集に譬へて見ると好事から植物などを集める人の採集と、植物學者の採集との相違がある。專門家は全國の植物分布に略通じ、集むべきものと然らざるものとの別を知つて居り、集める方法を知つてゐる、然るに一地方の狹い範圍だけで他地方との比較を知らぬものは勞して價値なき物を集め、偶、貴重な標本を採集してもその保存や整理についても遺憾な點が多い。之が爲に十年間採集に從事してゐる好事家の蒐集が數日の專門家の採集にも劣る如き結果が起る。勿論、一地方の方言の記錄は丁度一地方の植物の flora と同樣に理想を云へば、あらゆる言語を網羅すべき筈である、しかし、その中には特に研究すべきものと然らざるものとがある、之を鑑別する爲には科學的な專門知識、少くも分布に關する知識が必要である。

方言の研究も種々な視角から行はれるから、目的によつて研究法の變つて來るのは當然で民俗學の爲に方言を蒐集する場合には音聲學や語法學の知識は言語調査の場合程、必要でない。之に反し、言語調査の場合でも民俗學の常識

は一通り必要である、單語の蒐集に際して便宜を得る事が多い。

一地方の完全なフロラがその土地に在住する植物學者によつて完成されるやうに、一地方の言語記錄はその土地に在住する方言學者の手によつて初めて完全なものとなる。方言學が完成するためには各地にこの專門的な素養をもつ採集家が現はれる事が最も望ましい事である。卽ち、方言採集の趣味と、その正しき方法の普及が第一の問題となる。

小學生が胴亂をさげて野外に雜草を集めるのも、植物採集の第一階梯である、採集の趣味や方法はかくして體得されて行く。一冊の採集手帖と一本の鉛筆とによる方言採集も、この意味に於て笑ふべきものではない、今こその採集物は價値なき雜草で充滿して居ても、優れたる植物學者がかくて養成されて行くからである。

植物學者の中には一地方の植物目錄の完成に努める人もあり、または苔類とか菌類とかを專門としそれだけを全國的に調査する人もある。方言の研究にも恐くは今後は同樣な分業が行はれて進步して行く事と思はれる。現に博物學者の中に或る類を限りて全國的に方言を集めて居る人も少くない。方言の全野を一人で研究する事は全く困難であるから、夫々地方の有志はその地方の調査を分擔し、音聲學者は音韻を、語法學者は語法を、單語の如きはその專門專門で調査するやうになれば方言學は著しく進步する事と思はれる。

植物を研究する際に、標本を採集し、その名稱を知り、腊葉にすればそれで滿足するものが少くない、其と同樣に方言を研究するものにも方言集でも編纂すれば能事終れりと考へる者が少くない。一步進んで分布の調査でも出來れば、それ以上に進んで研究しようとする人はごく稀である。しかし、分類學が植物學の入口であるやうに、方言集の作成は方言研究の第一の準備行爲たるに過ぎない。植物の形態や生理の學問があるやうに、方言でもその生態を究める事が最も興味のある方面である、方言集や言語地圖の作成はその基礎を作るに過ぎない。言語地圖を作つても之を

「讀む」事が行はれなくては圖を作つた甲斐がないと云ふものである。但し、地圖の作成は普通人にも出來るが、之を讀むとなると、研究者の天分と學問の有無の差が顯著に現はれて來る、知識の狹い透視力のないものの「讀み」は徒らな獨斷となり「ひとりよがり」となる。之は戒しめなくてはならない。

以上、採集者の種類を中心として採集方法を述べて來たが之を要約すると次のやうになる。採集には文獻によるものと、聽取によるものとある、一つを目の採集とすれば一つは耳の採集である、目の採集は出來るだけ之を避けなければいけない。止むを得ずんば耳の採集によつて之を正す必要がある。

耳の採集者にも旅人と移住者と土人との區別がある、旅人の採集は淺く土人の採集は深い、ある人はこの土人の採集を「心」の採集と云つてゐるが至言であつて、眞の方言研究は素養ある土人の手を待つにあらずんば完成の見込はない。日本語を眞に理解するは日本人のみなるが如く、方言を正當に理解し得るものはその地方人のみである、しかし、我國に日本文法を外人敎師から敎へられた時代があつたやうに、土人が他地方人から敎へられる事も多い。旅人は比較的早く他地方の方言の特色をつかむ事が出來る、之は耳馴れぬ言葉に氣づく爲である、外形的な特色はつかむものの、その言語の核心に觸れる事はまた旅人には許されない。この言葉の魂を握ることが土人の尊さであるが一方素養なき土人は比較によつて玉石を辨別する手段を知らない。ここに旅人と土人との中間に位する移住者の地位がある、移住者によつて方言集がよく編纂されるのはこんな事情があるのである。しかし、結局は優れたる土人の蒐集こそ最も期待すべきものである。

採集者と話者とについてあまり多く語りすぎたやうである、今度はその研究法について略述してみる。

言語研究にはいつも音韻、語法、單語の三部門が問題とされ、綜合的研究の前に一應、この各部門についての分科

的研究が檢討される。アクセントは音韻に、語構造は單語の調査中に擧してよい。
單語から述べる。單語の調査には方言採集簿などを利用する事が初學者にとつて便利である、採集簿の內容については旣に之を說いた、尤も、採集簿によれば所揭の標語以外のものを集める事は困難である、言語地理學的硏究で一定の單語に限つて蒐集する場合はそれでもよいが、あらゆる地方語を採集する場合には標語にのみたよる事は出來ない、各地特有の言葉で標語に表はすべからざるものが多い。たゞ初學者には漫然と集める事も出來ないから、假に採集の要領を示したものが採集簿で、云はゞ習字に於ける永字八法である、格を習つたら格を捨てる覺悟がいる。採集手帖無用論は寧ろ方言學の進步を意味するものである。單語を集める場合、話者に話しよい氣分を作る必要は前にも述べた、話者の心には餘裕がなければならない、仕事の終つた夜とか、雨の降る休日で話相手のほしい時に爐邊などの世間話から入つていつてよい、酒や煙草を利用するもよからうし、俗謠や昔話から引出すもよからう、こちらも方言を使ふ位なら一層よい、或る採集者は話者に方言學界の現況や硏究の趣味などを聞かせると云ふが、話者が敎育のある人なら之も一策であらう。但し採集者の喋舌は嚴に戒めねばならない。
かゝる環境は話者の心に安慰を與へるが、最初に質問する材料は話者の熟知する事項でなければならない。漁村なれば漁の話、山村なれば山の話、雪國なれば雪の話、養蠶地なれば蠶の話、かう云ふ主題を選んで、之を主線として連想によつて諸方面にふれて行く。また時にはその話者の身邊をとりまいて居る什器、道具の名稱や用法から衣服、住宅等の細部について實物を指して聞いて行くのもよい、之も細かく聞いて行くと驚くほどの材料がある。次にはその時節に密接な話題を選む、田植とか、祭禮とか、小正月の行事とかを中心にして之に關係ある事を細大となく語らせる。婚禮、出產、葬式なども適當な場合に語らせて、之に關する名詞は勿論特殊な動詞、形容詞などに特に注意し

て聽取する。或る話題を中心として連想によつて廣く關係の單語を集める方法である。この際、注意すべき事は抽象的な名詞や、動詞、形容詞の如き用言に特に心を配ばる事である。また、方言の各語の意義はかなり理解するに困難なものであるから、名詞で實物のあるものは實物を見たり、動詞や、形容詞や副詞などはよくその用法を例によつて呑込む事が必要で、標準語の對譯によつて安心してはならない。

方言集の各語の譯に、いゝ加減な標準語をあてて滿足する事は頗る危險で、長い文句を使つても委曲に之を說明すべきもので、標準語と類似の觀念なら猶更その區別を十分に記すべきである。方言中の類似語にもその用意が入る、痛む事を「ハシル」「ニガム」「コワル」と云ふなら、その區別を明かにしなければならぬ。

この逆に、標準語から方言を聽く場合にも同樣である、極端に云へば、標準語と全然同じ意義の方言は極めて少いと思へばよい。實物のあるものは實物を、無ければ繪畫でも示すのが理想である。

單語の中で語構造に關するものは、同じ接頭語や接尾語を含む言葉をなるべく多く集める必要がある。「狹マコイ」「ブチコワス」「フユシゴロ」などをあげて「丸コイ」「ブンナグル」「ヲシゴロ」等等を求めて行く方法である。

この外に擬聲の副詞や、兒童語や地名、人名なども暇があつたら集めたい。之も地方に特殊なものを中心とすべきである。

單語の採集に比べて極めて困難なのは語法の調査である。抽象的な發問法は嚴禁であると云ふより、法則は他人に聞くべきものでなく、地方人の會話から採集者の力で分析し歸納すべきものである。地方には地方人特有な考へ方があり思想發表法があるので既成語法では律すべからざるものが多い。しかし、單語の採集に方言採集簿を利用するやうに、從來の標準口語法を準則として比較研究する事が便利である。これも口語法に拘はれてはやはり地方特有の云

ひ方を失ふ恐がある。出來るなら地方人の會話を澤山に速記してその中から法則を歸納するのが正道である。但し、一時の便法としては文法の各形式を含む短文を方言譯させるのも一法である。尤もこの時に出來る方言譯は必ずその例文に引かれて純粹な形ではないから全文を方言形と考へてはいけない。

この短文の方言譯については柳田氏の云はれる通り、平等の友人同士のものを基準とし、目上、目下への云ひ方を求めて行く事が適當であらう、待遇關係の發表の發達しない地方もあるが、驚くほど細かな言ひ分けをしてゐる地方もあり國語の方言調査としては先づ之に着目すべきである。

調査すべき語形式の種類は列擧するに困難であるが動詞、形容詞の活用と、助動詞のあらはす種々なる表現法、助詞のあらはす種々なる意義が方言に於て如何なる語形に變化して居るかを先づ調ぶべきである。この爲には調査者はかなり精密に標準語法に通じておく必要がある、「アリガトー・アリマス」とか、「ヨミナサイ」とか、「オカシイデス」などが異様に感じられる位の練習は必要であらう。

語法の調査は頗る困難で、現在行はれてゐる諸方法には皆缺陷がある、柳田氏が「採集は不用意の會話から實際用ゐて居るもの卽ち、活きてゐる言葉を前後の續きと共に覺えて來る」事を勸めて居られるのは同感であるが、旅行者の採集としては中々、この方法では文法の重要な形式を必要なだけ集めにくいと思ふ。動詞、形容詞の活用などは發問法以外には集める望がないやうだ。所謂、慣用語句、例へば朝夕の挨拶や、吉凶の挨拶などは固定してゐるものであるから之は容易に記録される。

更に音韻調査となると、耳と舌との素養の必要を力說せざるを得ない、音聲學の理論と實際とに通じてゐる專門家にして音韻の調査は初めて可能となる、音聲學を知らざる者は勿論、その理論のみを知つて耳の發達せざる者は音韻

調査特に音韻組織の調査に關與する權利はない。從つて音韻組織についての發問法の如きは調査者が直接、話者の實際の地方音を聽取する場合にだけ有效である。書面によつて音韻組織に關する回答を求めるなどは無益なるのみならず寧ろ有害である。音韻組織の調査として、あまり完全な調査法ではないが、人工口蓋を使用して口蓋圖をとる事は、もう少し流行してもよいと思ふ。この口蓋圖によつて舌と口蓋との接觸狀態を實測する事が出來る、地方音の母音、子音の調音狀態はこれだけでも現在よりは明かになるであらう。

耳を練習する爲には基本母音の語學レコードなどを利用してもよい、之は Jones の吹込んだものが發賣されてゐる。

今日のところでは音聲學者が直接に臨地調査をするか、地方人の發音を平圓板に吹込んで之を學者に鑑別してもらふ以外に、地方音の音韻組織を明確にする方法はない。

（アクセントは音樂に堪能な人によく聞き分ける人がある、ある選まれた代表的な單語のアクセントを調査すれば地方のアクセントの大體の性質は分るやうである、之も耳の發達しないものにとつては調査をあきらめるより外はない。）

國語方言の音韻現象中で最も注意すべきは母音、特に「イ」「エ」と、「イ」「ウ」間の中間母音である、また二重母音の「アイ」「オイ」「ウイ」の變化は是非調ぶべきものである。子音では良行音や波行音に種々なる種類があり、加行鼻濁音の分布もかなりに興味がある。音節では、「セ」「シェ」「ヒェ」、「カ」「クヮ」、「ヂ」「ジ」、「ヅ」「ズ」などが昔から注意されてゐる。

此等の音韻調査は單語の採集と同時に調査ができる。

嚴密な音韻組織の調査が一般の採集者に困難な事は前に述べた通りである、從つて自信のない人が音標文字を使用する事は遠慮してもらひたいが此等の人でも音韻變化の調査には參加が可能である。標準音節を片假名で記し、標準音節以外の音節は平假名で書く程度の表記法でも、發音をなるべく正確に寫すやうに心掛けさへすれば所謂訛音を表記するには間に合ふと思ふ。

訛音については中々困難な問題がある。第一にはそれが訛音かどうかを決定する問題が困難である、例へば「ナメクジ」を「マメクジ」と云ふ地方があるとすると之はnがmに同じ鼻音だから通じた爲に起つた訛音だと見てよいかどうか疑問である、或は「豆」と云ふやうな心理的の類推が作用してゐるかも知れない。「カタツムリ」「カサツブレ」の蝸牛方言でもsとtとの齒音相通だとすぐには定められないやうである。

第二は訛音と云ふ言葉の意義である。訛と云ふ文字は譌と云ふ文字と同字で不正と云ふやうな意味がある。訛音は所謂ヨコナマレル音である。しかし、東京音と地方音とについて何れが正、何れが不正と云ふ事は無論出來ない。又、古形が何れであるかも中々決定しにくい、古音はよく地方音に保存されてゐるからほんとの訛音はむしろ東京音に多いかも知れない。それで訛音と云ふ時には「東京音を假に基準とし、その基準音と相違のある音」と云ふ意味に考へたい。兎の訛音が「オサギ」であると云ふ意味は、「東京語のウサギを假に基準と認めて云ふだけ」の事で、「ウサギ」を正しいと見る考でもなく、「ウサギ」から「オサギ」が出たと考へてゐるのでもない。

第三には訛音と云ふものの中にも、その勢力に色々と程度の相違のある事に注意しなければならない。例へば或る地方では「セ」を「シェ」と訛る、さうして之は全く例外がないと云ふやうな場合もある。又或る地方では「ロ」を「ド」と訛るが、之は大部分がさうであるが、例外もかなりあると云ふ場合もある。又、或る地方で「モ」を「ボ」

と訛るが之は「漏る」と「守る」と「餅」だけに限られてゐると云ふ場合もある。又或る地方では「サ」を「ハ」に訛るが之は敬稱の接尾語「さん」の一語に限ると云ふやうな場合もある。之をたゞ一樣に差別なく列擧する事は正當でない。

一般に訛音は音節を單位として調査すべきもので之を更に母音、子音に分けて觀察するのは國語の場合に於ては精密に似て反つて正しい取扱でない。

また、音韻變化は連音の關係から起るものが多いので、前後の音節と離して考へるのは正しくない。語頭音の變化と語間音の變化とは別なものとして觀察する必要がある。

音韻について述ぶべき事はまだあるが豫定の頁數を超過するために之で筆を留めて整理の方法にうつる。

方言を採集し終つた上は之を整理して方言辭書とか方言語法とか方言分布圖とかを作成する順序となる。この中で方言辭書について一言したい。

方言辭書では先づ、その編纂法に疑がある。從來、多く五十音順による方言の排列が行はれてゐるが之は使用上、甚だ不便である。例へば蝸牛の方言を見出さんとする場合、この種の辭書では是非、初から終まで一通り目を通さなければならない。之は數多の地方を比較する場合にはその煩に堪へない。

然らば、標準語の五十音順排列とし、その下に方言をあげたらと云ふ方法も考へられるが、方言と標準語とはかゝる對照的な方法によつて比較さるべき性質のものでないから、かゝる方法は全く机上の空論で實行する事は出來ない、各方言に對する適當の標準語と云ふものを我々は恐く發見し得ないであらうから。

そこで折衷的方法として、標準語よりの索引を五十音順の方言辭書に附錄とする方法が考案され實行されてゐる。

第三には部門別による方言排列も考へられるが、之も如何なる部門に入るべきかを決定しにくい單語が多くなり「雜部」のみが厖大となつて所期の目的に叶はない。かく、この三種の方法には何れも短所がある。

方言辭書にはその語彙を所謂方言（土語）と訛語とに二分する方法がよく行はれて居るが、之は便利であると思ふ。

また、時に最初に地方別をした辭書もある。例へば青森縣の方言辭書がまづ、南部篇、津輕篇と分けてゐる如き例である。

一地方の方言辭書を作る人は先づ、以上の問題をよく考慮する必要があらう。

「秋田方言」（秋田縣廳發行）の如く音韻、語法の大體が語彙と共に說かれてゐるのは便利である。英國方言辭書もライトの方言語法を附錄としてゐる。

また、方言辭書では方言の分布區域が重要なものであるから地圖は是非つけてほしいものだし、舊藩領域圖、方言分布圖も添へてあればなほ結構である。慾を云へば、その地方の特有な品物の圖譜なり寫眞なりがついて居たらそれこそ完全である、之は挿圖として各語の條に揭げても便利である。次に各語の揭記方について理想的な註文を書いて見る。之はこの通りの辭書を作れと云ふのではないが、大體の方針を示すのである。

一、方言は音標文字で表記しアクセントを示す。

二、活用語には活用を示す。

三、語の意義を本義、轉義の順で詳細に說明する、標準語を揭げる場合には方言との相違點を說明する。

四、名詞は必要なる場合には挿圖を以て說明を補足する。熟語、慣用句を揭げる。

動詞、形容詞、副詞、助動詞、助詞等は品詞別の外に必ずその用例を各意義每に擧げる。

五、類似語があれば之をあげてその相違を說明し、分出語があれば之を併記して參考に供する。
六、使用地域を明示する、之は町村程度にまで及びたい。
七、使用者の年齢、性、職業等を必要に應じて記す。
八、その方言の由來を記す。之は必ずしも語源の說明でなくとも固有語か外來語か、古語か新語か、現在に於ける勢力などについて必要な場合に注記したい。死語の場合だつたら、その話者を記す。文書より採錄したるものはその出所を示す、なほ、その語の起源についての傳說などがあつたらそれも揭げたい。
その他、敬語とか、卑語とか、小兒語とか云ふ注意は必要に應じて加へる。
以上の中で最も必要なのは、表記法の正確と、語釋の詳密と、用例の揭記と、地域の明示で、之を缺いた辭書は完全だと云ふ事が出來ない。
整理に關聯して言語地圖の作成についても語るべきであるが之は旣に略述した事であるから、ここには省略する。
方言調査は採集の場合でも、また整理の場合でもその地方の特殊な言語現象に特に力點をおいて材料を網羅し、說明に當つても之を詳說する必要がある、すべての言語現象を同一程度に取扱ふのは、如何にも科學者の態度のやうであるが之は方言研究の立場から考へると正當でない。（完）

○本章關係參考論文及著書

方言に就いて　保科孝一（帝國文學　第四卷第二號以下）
國語教育方言研究號（國語教育　第十六卷第九號）
南島方言採集行脚　宮良當壯（方言　第一卷第二、第四號）

方言採集簿　保科孝一擔任、國語調査委員會（國定教科書共同販賣所發行）
方言採集手帖　東條操（鄕土研究社發行）
簡約方言手帖　東條操（鄕土研究社發行）
方言研究と言語の正訛　金田一京助（方言　第一卷第四號）
方言研究の方法　東條操（方言　第一卷第三號）
方言語法の問題　永田吉太郎（方言　第二卷第三號）
國語音韻論　言語誌叢刊　金田一京助（刀江書院發行）
音訛事象の考察　柳田國男（方言　第一卷第一、第二、第三號、第二卷第一、第四號）
方言の音韻に關する諸問題　東條操（音聲の研究　第二輯）
アクセント境界線及びアクセント調査について　服部四郎（音聲の研究　第四輯）
人工口蓋の卽席製作法　淺井惠倫（音聲學協會會報　第一號、第二號）
方言集作製について　山本靖民（土の香　第六卷第四號）
方言の譯語に就て　大田榮太郎（土の香　第六卷第四號）

昭和七年六月十日印刷
昭和七年六月十五日發行

岩波講座 **日本文學** 第十三回配本

編輯兼發行印刷者　東京市神田區一ツ橋通　岩波茂雄

印刷所　東京市神田區錦町　精興社

大森製本

發行所　東京神田一ツ橋通　岩波書店